FUJIFILM
Value from Innovation

フジフイルム スクエア
2023年度
活動報告書

2024

FUJIFILM SQUARE

フジフイルム スクエアのこれまでの活動

開館以来、延べ1,700回以上の写真展を開催し、800万人以上の幅広い年代の方々にご来館いただいています※1。

※1 2023年3月時点

富士フイルムは創業以来「写真文化」を守り育てるため、写真の素晴らしさ、楽しさ、感動、そして写真を残す大切さを伝える活動を一貫して行ってきました。

1957 富士フォトサロン開館

プロ、アマチュアを問わず優れた作品を発表する場として、フジフイルム スクエアの前身となる富士フォトサロンを銀座に開館しました。

2007 フジフイルム スクエア開館

東京ミッドタウン(六本木)への本社移転と同時に、複合型ショールーム「フジフイルム スクエア」を開館しました。「富士フォトサロン」から改名した「富士フイルムフォトサロン」に加え、写真の歴史とカメラの進化を学べる「写真歴史博物館」などを併設。

2014 フジフイルム・フォトコレクション収蔵

富士フイルムグループの創立80周年を機に、幕末・明治から現代に至る日本の写真史を飾る101人の写真家選りすぐりの一枚を、「フジフイルム・フォトコレクション」として収蔵。これらはフジフイルム スクエアをはじめ全国の美術館でも展示され、その芸術的価値をお伝えするとともに、日本写真史の体系的な理解に役立てていただいています。

2017 開館10周年記念写真展の開催

フジフイルム スクエアの開館10周年を記念し、写真の「歴史」・「今」・「明日」という3つのテーマで、「写真の過去・現在・未来」を発信する12の特別企画展を1年間にわたり開催しました。

10th ANNIVERSARY

2018 メセナアワード2018 優秀賞「瞬間の芸術賞」受賞

フジフイルム スクエアの活動が、企業メセナ協議会※2が主催するメセナアワード2018 優秀賞「瞬間の芸術賞」を受賞。長年にわたり、写真作品を発表、鑑賞する場を提供し、人と人の心がつながる感動体験を広め、写真文化の普及と発展に貢献していること、時代を超える価値を持つ貴重な作品の展示機会を作り、記録性や芸術性という写真の本質を、時代に合った内容で発信し、写真を文化財として継承・育成する可能性を追求し続けていることを評価いただきました。

※2 企業による芸術文化支援(メセナ)活動の活性化を目的に1990年に設立された、日本で唯一のメセナ専門の中間支援機関

2024 フジフイルム・フォトコレクションII 収蔵

富士フイルムグループが創立90周年を迎えた2024年、「人を撮る」をテーマに20世紀の世界写真史に名を連ねる写真家20名によって撮影された53点の歴史的価値の高い作品を「フジフイルム・フォトコレクションII」として収蔵。2024年4月26日(金)～5月16日(木)フジフイルム スクエアにて初披露した後、時代を超える価値を持つこれらの作品群を「フジフイルム・フォトコレクションII」として大切に保存するとともに、国内外で展示・公開していきます。

「こころ彩るところ」フジフイルム スクエアは、時代の変化に適した形で、写真文化を未来へと絶えず、守り育み続けます。

THIS IS MECENAT 2024

富士フイルムフォトサロン、写真歴史博物館、フジフイルム・フォトコレクション、若手写真家応援プロジェクトは、2024年、公益社団法人企業メセナ協議会より、「芸術・文化振興による社会創造活動」として「THIS IS MECENAT 2024」の認定を受けております。

施設コンセプト

こころ彩るところ

「写真の持つ力に感動しました」「思わず私も撮りたくなりました」
訪れたお客さまから、そんなたくさんのお声をいただいています。

フジフイルム スクエアはこれからも、
価値ある作品との出会いを通じて、
人と人が心豊かにつながる場でありたいと考えています。

例えば、見応えあるオリジナルプリントを、思う存分鑑賞する。
出展者の、作品作りの背景や意図を理解する。
写真家の心に共感し、一緒に見ている人と気持ちを分かち合う。
歴代のカメラや写真の歴史を知り、好奇心の羽根を広げる。

この場所で生まれる出会いや感動で、お客さまの心が鮮やかに彩られ、
その体験が色褪せずに記憶に残ること。それがフジフイルム スクエアの願いです。
“こころ彩るところ”
私たちはこの言葉を胸に、さまざまな活動を通じて写真の素晴らしさや楽しさ、
そして残す大切さを伝え、写真文化の発展と心豊かな社会の実現に貢献していきます。

FUJIFILM SQUARE

ご挨拶

フジフイルム スクエアは、富士フイルム株式会社東京ミッドタウン（東京都港区）本社にある複合型ショールームです。優れた作品の発表の場「富士フイルムフォトサロン東京」、写真の歴史とカメラの進化を学べる「写真歴史博物館」、最新の写真関連商品を試せる「タッチフジフイルム&イメージングサービスカウンター」、化粧品・サプリメントなどの当社ヘルスケア商品を取り揃えた直営店「ASTALIFT 六本木」で構成されています。

富士フイルムは、写真・映像業界に大きな影響を与えるイノベーティブな製品を数々生み出し、グローバルに供給するとともに、「写真文化」の発展のため、写真の素晴らしさ、楽しさ、感動、残す大切さを一貫して伝えてきました。そして、写真事業で培った独自技術を進化させ、それらを活かして事業領域を拡大し、幅広い分野で人々の生活の質の向上を追求してまいりました。

フジフイルム スクエアは優れた写真作品の展示を通じ、写真文化を守り育て、写真の持つ力を発信する場として、2007年にオープンいたしました。開館以来、2023年度までに、延べ1,700回以上の写真展を開催。みずみずしい感性を持つ若手写真家、独自のスタイルを確立し活躍中の写真家、写真史に名を刻む巨匠など、国内外の幅広い層の写真家の皆さまの作品を発表・公開するリアルなスペースとなっています。そして、作品の内容も、厳しくも美しい自然の姿を伝える風景写真、被写体のドラマを語るポートレート写真、社会や文化を写し出すスナップ写真、歴史的な瞬間を後世に伝えるドキュメンタリー写真など、多岐にわたっています。こうした多彩な作品を展示し、来館の皆さまから新たな驚きや感動の声を頂戴するなど、開館以来累計で800万人以上の方々に写真鑑賞の場として親しんでいただいています。

写真の新しい視点や表現をさらに豊かに発信する活動の一つとして、2023年度は、特に若手写真家応援プロジェクトの「写真家たちの新しい物語」*1と「ポートフォリオレビュー*2/アワード」に注力しました。

「写真家たちの新しい物語」ではプリント製作費などを支援して2本の写真展を開催。「ポートフォリオレビュー/アワード」では45歳以下の写真家・写真家を志す方から作品を募集し、レビュワー*3による事前審査、レビュー、ファイナリストレビューを経て決定したアワード受賞者4名による写真展を開催しました。若手写真家に写真展示の専門的な知識や作品の発表の場を提供することで、彼らの創造性を引き出すことが、写真表現の新たな可能性や幅広い世代の共感を呼び起こす写真の力の発信につながりました。

富士フイルムグループは2024年1月20日に迎えた創立90周年を機に、グループパーパス「地球上の笑顔の回数を増やしていく。」を制定しました。

富士フイルムは祖業である「イメージング事業」で感動の瞬間や大切な思い出を形に残し、お客さまに笑顔を届けてきました。これからも新たな価値ある製品・サービスを創出し続けることで人々に新たな感動や体験を届けてまいります。そして、フジフイルム スクエアは写真展示というリアルなコミュニケーションの場で、作品の新鮮な視点や独自の表現を通じて人々の感性に働きかけ、写真文化への関心や理解を深め、心の豊かさ、人々のつながりの醸成、そして「地球上の笑顔の回数を増やしていく。」ことに貢献していきます。

*1.若手写真家が写真展を開催するための制作費などを支援する「写真家たちの新しい物語」を若手写真家応援プロジェクトとして2013年に立ち上げ、2023年度までに合計38回開催しています。
*2.ポートフォリオレビュー：作品講評会（以下レビュー）
*3.レビュワー：講評する講師

CONTENTS

企画写真展レポート

FUJIFILM SQUARE 企画写真展

01 VOGUE BRASIL に愛された日本人フォトグラファー ノブオ ミケランジェロ タカノ ☆ アンソロジー ···· 06

02 ジャン・アンリ・ファーブル生誕200年記念 今森光彦の地球昆虫紀行 ···· 08

03 広川泰士写真展「2023-2011 あれから」 ···· 10

04 気ままなボス猫『ケンジ』 ～ 猫フォトの撮り方・魅せ方教えるべや ～ ···· 12

05 石川賢治 宙(ソラ)の月光浴 SPECIAL SELECTION ···· 13

06 空撮写真家 山本直洋写真展「そらをとびたい」 ～空、大地、地球を感じて。～ ···· 14

富士フイルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト

[写真家たちの新しい物語]

07 上吉川祐一写真展「いのち」 ···· 15

08 小野啓 写真展「私のためのポートレート」 ― 全国の高校生のポートレートシリーズ ― ···· 16

[ポートフォリオレビュー／アワード 2023]

09 ポートフォリオレビュー／アワード 2023 ···· 17

富士フイルム 企画写真展

10 GFX Challenge Grant Program 2022 ～Make Your Next Great Image～ ···· 20

11 KYOTOGRAPHIE インターナショナル・ポートフォリオレビュー 2023 FUJIFILM AWARD受賞作品 ユーリア・スコーゴレワ写真展「Salt and Tears」 ···· 22

12 東京会議の写真幸福論 ···· 23

富士フイルム 企画写真展

13 セルカン・ギュネシュ写真展「WITHIN」 ···· 24

14 写真家 ニコラ・ダティッシュ写真展「芸を継ぐ者～Inheriting the House」 ···· 25

15 FUJIFILM Xシリーズ作品展「夜と光」

16 FUJIFILM Xシリーズ作品展「Not only Landscape」

17 前田景 写真展 INTO THE NORTH presented by FUJIFILM Prints & Gifts ···· 26

18 FUJIFILM Xシリーズ 新製品 X-S20作品展「Explore the Unseen World」

19 FUJIFILM GFXシリーズ 新製品 ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX100 II」 NEXT STAGE OF LARGE FORMAT「GFX」展

20 遠藤励 写真展「MIAGGOORTOQ(ミアゴート)」 ···· 27

21 FUJIFILM X100VI 作品展「Timeless Value -色褪せない価値-」

22 富士フイルム・グリーンファンド 40周年企画「わたしの自然観察路コンクール」受賞作品展 ···· 28

当社協力写真展

23 ウルトラセブン55周年記念 中西学 写真展「55 years of ULTRASEVEN Inheritance」 ···· 29

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展

24 フジフイルム・フォトコレクション特別展 シリーズ第2弾「写真表現と技法の結晶化」 ···· 30

25 高橋宣之写真展「鳥の歌 El Cant dels Ocells (オル カン ドルソ セルス)」 ···· 31

26 生誕90年記念 細江英公作品展「この写真家の熱量を観よ!」 ···· 32

27 光の魔術師 緑川洋一「瀬戸内のメルヘン」 ···· 33

写真展開催リスト

当社が主催・協力する企画展33本(若手写真家応援プロジェクト3本、写真歴史博物館の企画写真展4本含む)、公募展43本、合計76本

施設概要レポート

VOGUE BRASIL に愛された日本人フォトグラファー ノブオ ミケランジェロ タカノ ☆ アンソロジー

2023年6月16日(金)ー7月6日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2・3・ミニギャラリー

展示概要

1985年に日本人として初めて『VOGUE BRASIL』のフォトグラファーとなったノブオ ミケランジェロ タカノ氏。13歳のときに家族の仕事の関係で日本からブラジルへ移住、イタリア系家族の中で成長し独特な美的感覚と世界観を育みました。1970年代、「奇跡」と呼ばれた経済成長に沸いたブラジルのファッション産業が持つ多文化的・国際的な魅力に駆り立てられ、ファッションフォトグラファーとしての道を歩み始めました。その後、タカノ氏はブラジルを起点にパリ、東京、ニューヨークなどにも拠点を広げ、さまざまな媒体で第一線のファッションフォトグラファーとして活躍を続けました。アーヴィング・ペン、ヘルムート・ニュートン、ブルース・ウェーバーといった世界的ファッションフォトグラファーと同時期に『VOGUE』の誌面を飾った唯一の日本人写真家です。

本展では、『VOGUE BRASIL』『GQ』など世界のファッション誌に掲載された作品にはじまり、PARCOや富士フイルムなど日本企業の広告写真、そして国内のカメラ誌に掲載された独自の世界観を持つオリジナル作品まで、タカノ氏のデビュー当時から今日に至る足跡をたどりました。主にフィルムで撮影した作品147点を、大型の銀写真プリントで展示。日本人としての繊細な感性とブラジル・ラテンの奔放な色彩感覚が絶妙にミックスされた、タカノ氏のゴージャスなファッション写真の魅力を存分に味わえる「アンソロジー」となりました。

展示作品点数

147点

クレジット

主催:富士フイルム株式会社
特別協力:VOGUE BRASIL
後援:駐日ブラジル大使館、港区教育委員会
デザイン:CA 黒澤王彦
プリント制作:プロラボ クリエイト

併催イベント

タカノ氏へのインタビューとタカノ氏が選んだ映画音楽を交えてラジオ番組風に館内で放送 ※会期中毎日

主要メディア掲載

写真・カメラ紙(誌):隔月刊風景写真(6月20日)、CAPA(6月20日)、デジタルカメラマガジン(6月20日)、フォトコン(6月20日)/その他雑誌:月刊ギャラリー(7月1日)/Web:ブラジル日報、公益社団法人日本写真協会、CAPA CAMERA WEB

来館者数

合計16,046人(21日間)

実施レポート

タカノ氏の手がけてきた世界的なファッション写真が一堂に会した本展が、今回『VOGUE BRASIL』からの特別な許諾により実現したことは特筆すべき点です。ファッション誌に掲載される写真は、出版社やファッションデザイナー、モデルなどの権利が関わり、写真家だけの意志で展覧会を行うことは容易ではありません。今回実現できたのは、タカノ氏が長年にわたり築いてきた『VOUGE BRASIL』や関係者たちとの固い信頼関係の証です。本展では、発行元責任者のサイン入り許諾書を、当館からの感謝の言葉を添えて掲示しました。

そのようにして実現した本展は、タカノ氏の作品展であるとともに、まさに80〜90年代のファッションのショーケース。展示作品の多くは、繊細な色表現が可能な富士フイルムのカラーリバーサルフィルム「フジクローム」で撮影され、タカノ氏が大切に保管していたものです。今回、最新技術で大型の銀写真プリントに当時のイメージをビビッドに蘇らせました。このような回顧展を開催できたことは、タカノ氏にとっても意義深かったといいます。

タカノ氏の写真には「エディトリアル写真」が多いのが特徴です。「エディトリアル写真」とは、雑誌などの出版物に、記事と一緒に掲載する一連の写真のことで、写真家の独創性だけでなく、掲載誌の編集方針にふさわしいクオリティーや品格が求められます。本展では、独立した写真作品として魅せることに加え、当時掲載されたオリジナル記事のエディトリアル・デザイナーの表現意図を反映できるような展示レイアウトを工夫。また展示写真の横には、その作品が掲載された『VOGUE BRASIL』をはじめとする貴重なファッション誌の実物(タカノ氏所蔵)も添えました。

当時を知る世代の来館者からは、勢いのあった時代を懐かしむ声が、またその時代の空気に初めて触れた世代からは、ポジティブで自由奔放な表現への新鮮な驚きと羨望の声が聞かれました。会場に用意したタカノ氏へのメッセージカードの記入者のうち、10代が42%を占めるなど、その作品世界は若い世代の強い関心も引きました。

※ノブオ ミケランジェロ タカノ氏は、2024年4月15日に逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

来館者の声

- 今の時代に見ても新しいと思える作品で素晴らしかったです。カッコイイ!
- あの『VOGUE』の写真を日本人が撮影していたなんて、びっくりしました! とても素敵です。
- 作品には「時代」が写っていました。そして、雑誌の実物が展示されているなど、当時の世界を見る楽しみがある構成も良かったです。見応えがありました。
- どの写真も細部まで美しかったです。解説文からも撮影に細やかな工夫や遊び心が込められていたことを感じ、とても感動しました。
- モデルさんの情熱的な一瞬を切り取った作品が素晴らしく、言葉に表せないほど感動しました。

ジャン・アンリ・ファーブル生誕200年記念
今森光彦の地球昆虫紀行

2023年7月28日(金)ー8月24日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2・3・ミニギャラリー

展示概要

フジフイルム スクエアでは、毎年夏休みの時期に子どもたちの自由研究を応援する企画を実施しています。2023年は昆虫学の先駆者ジャン・アンリ・ファーブルの生誕200年を記念し、日本を代表する自然写真家・今森光彦氏の写真展を開催しました。

今森氏は、長年にわたり熱帯雨林から砂漠、サバンナ、高山まで広く世界の辺境地を訪れ、昆虫の不思議な世界を写真に収め、ファーブル関連の書籍も多く出版。2009年には、昆虫の驚異的な姿を芸術性豊かに捉えた写真集『昆虫4億年の旅』で第28回土門拳賞を受賞しています。また、自然をテーマにした切り絵の作家としても、多数の書籍を出版するなど広く知られています。

一方で今森氏は、故郷の滋賀県・琵琶湖のほとりにアトリエを構え、里山の生態系に入り込んでの撮影や、日本各地で荒れていく里山を再生する環境活動、生き物を最優先に考える環境農業にも取り組んでいます。

本展では、今森氏の写真によって大自然に生きる小さな生命・昆虫と出会う旅にいざなうとともに、その昆虫たちを見事にかたどった立体切り絵も合わせて展示。多角的な視点で昆虫の魅力に迫りました。

また、併せて今森氏が取り組む里山環境再生活動に関する写真も展示するとともに、今森氏によるトークイベントや切り紙ワークショップなど各種イベントも開催。子どもも大人も楽しみながら昆虫たちの生きる自然環境について考えていただく写真展としました。

展示作品点数

119点

クレジット

主催:富士フイルム株式会社
後援:NPO 日本アンリ・ファーブル会、公益財団法人 日本野鳥の会、港区教育委員会、大阪市教育委員会
監修:奥本大三郎(フランス文学者、作家、NPO 日本アンリ・ファーブル会理事長)
企画協力:有限会社オーレリアンガーデン
企画/デザイン:クレヴィス
プリント制作:プロラボ クリエイト

併催イベント

夏休み自由研究イベント【昆虫のふしぎ】
・今森光彦氏によるギャラリートーク
①「昆虫写真について」2023年7月29日(土) 13:30〜14:00
②「昆虫・自然との関わり」2023年7月30日(日) 11:00〜11:30
・今森光彦氏による切り紙ワークショップ
2023年7月30日(日) 13:30-15:00
本展特製切り絵作品ポストカードを配布
・今森光彦氏によるアーティストトーク「地球昆虫紀行」
2023年8月11日(金・祝) 13:30〜14:30
・来館記念「切り紙で昆虫を作ってみよう!」 ※会期中毎日
本展特製切り紙図案を配布

販売物

・写真集『スカラベ』(クレヴィス) ・写真集『里山ー生命の小宇宙ー』(クレヴィス)

Web公開動画

今森光彦氏へのインタビュー動画「里山・環境活動について」

主要メディア掲載

新聞:東京新聞(東京、茨城、群馬・栃木、埼玉、千葉、したまち、多摩・武蔵野、山手、神奈川、7月19日)、読売新聞夕刊(東京、札幌、7月24日)、朝日新聞夕刊(7月25日)、読売新聞(青森、岩手、宮城、山形、栃木、埼玉、千葉、山梨、長野、静岡、7月27日/群馬、7月28日/石川、7月29日)、朝日小学生新聞(7月27日)、朝日新聞(東京、むさしの、多摩、東京川の手、8月9日)/Web:All About NEWS、東洋経済オンライン、読売新聞オンライン、PRESIDENT Online、グノシー

来館者数

合計31,144人(28日間)

実施レポート

「世界の昆虫」と「日本の昆虫・里山・環境活動」という2つのテーマで構成した本展。入り口で来館者を出迎えたのは、メインビジュアルであるキイロツノギスの顔です。こちらをじっと見つめるようなユーモラスな表情を大きく色鮮やかに捉えた一枚で、来館者を今森氏の昆虫写真の世界へ一気に引き込みました。会場に一歩入ると、アジア、北米、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニア、中南米と世界を一周する形で、驚きに満ちた昆虫たちの姿がお出迎え。その作品の多くは、今森氏が愛着のあるフィルムカメラで数十年間かけて撮影したもの。昆虫の姿のみならず、その生態や周囲の環境の美しさまで丹念に捉えた作品群の魅力を、大型の高精細な銀写真プリントで最大限に引き出し、今森氏からも高くご評価いただきました。

「日本の昆虫・里山・環境活動」では、今森氏が里山で出会った昆虫の写真や里山再生などの環境活動について展示。今森氏が自身のアトリエで里山・環境活動について語る動画も上映しました。今森氏の活動はSDGs※の目標15「陸の豊かさも守ろう」にもつながるもので、来館者が身近な自然やSDGsについて考えるきっかけを提供できたと考えています。

また、子どもたちが今森氏と共に楽しめる夏休み自由研究イベントは、申し込み多数で増席するなど大盛況となりました。特に、子どもたちが写真を通して昆虫を観察し、自ら図案を描いて切り絵を創るワークショップでは、参加した子どもたちはみな目を輝かせて熱心に製作していました。会場には、大勢の子どもたちやそのご家族が訪れ、珍しい昆虫の生態を捉えた写真に見入ったり、今森氏へのメッセージカードに自身が気に入った虫の絵を描いたりと、思い思いに楽しむ子どもたちの姿が印象的でした。今森氏も「子どもたちの真剣な顔や喜ぶ声に触れることができてうれしかった」と語っています。また、今森氏が伝える昆虫の世界の奥深さや環境活動に共感し、何度も来館される大人の姿も目立ちました。館内アンケートでは、本展を目的に訪れた方の93%が「また来たい」と回答。幅広い年齢層の来館者を魅了した写真展となりました。

※Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連総会で採択された、2030年までに国際社会が社会課題として取り組むべき「持続可能な開発目標」です。

来館者の声

ぼくは、いろいろな虫を見て感動しました。ファーブル昆虫記で読んだスカラベが見られたのもうれしかったです。もっと虫に会ってみたくなりました。

ギャラリートークで聞いたバッタの生態がすごいと思いました。ワークショップでもたくさんのことを知ることができて楽しかったです。

作品の鮮やかな色と昆虫の力強さに圧倒されました。昆虫の不思議な生態と姿に興味を持ちました。

キイロツノギスの顔に誘われて写真を見に来ました。どの昆虫も生き生きとしていて素晴らしかったです。切り絵の見事さにもびっくりしました。

肉眼だと動きが早く見過ごしたり、気づかなかったりする虫たちの意外な様子が写真を通して分かって興味深かったです。そして、どの虫も生きるために必死なんだなあと思い、愛おしくなりました。

写真を通してそれぞれの昆虫の特徴を知ることができました。いろいろなことを感じ、考えるきっかけになりました。

広川泰士写真展「2023-2011 あれから」

2023年9月22日(金)ー10月12日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2・ミニギャラリー

展示概要

広川泰士氏は、1970年代以来、ファッション・広告の写真やCM・映画など多様なメディアで幅広い活躍を続ける一方、日本の地方を巡りながら、農家や漁師の方など、地域に根付き自然とともに暮らす人々にデザイナーズ・ブランドの服を着てもらい撮影したポートレート作品や、自然と人工物の風景を通して地球の営みと人間との関係性を問いかけた作品など、独自の視点による優れた作品で高い評価を得ている写真家です。

本展では、広川氏が2011年から12年間にわたり、東日本大震災の被災地の風景と、そこに暮らす家族のポートレートという2本の軸で撮影し続けている「定点観測」の記録を初めて発表しました。震災直後、津波被害の様子を知り、「何ができるかを考え、気づくと現地に向かっていた」という広川氏。まだ水の引かない被災地で支援活動を行う中、水中に浮かぶアルバムや写真、かつて自宅があった場所で家族の写真を探す人たちの姿が、深く記憶に刻まれました。そして2011年10月。地元での縁がつながり、気仙沼市役所の一角で、撮影を希望する被災家族の撮影会を無償で開催することとなりました。以来、広川氏は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による自粛期間を除いて毎年、撮影会を継続。並行して、釜石・陸前高田・気仙沼周辺の風景の定点観測撮影も続けました。

広川氏が見つめ続けた、あらがいようのない自然の力で破壊されたランドスケープと、日常を根底から覆された人々の営みが、それぞれ時とともに変化していくプロセスを同時に展示することで、震災以来の12年間とこれからの姿を考える契機としていただける写真展となりました。

展示作品点数

232点

クレジット

主催:富士フイルム株式会社
協力:広川事務所
後援:港区教育委員会
企画:コンタクト
デザイン:白谷敏夫
プリント制作:写真弘社、フォトグラファーズ・ラボラトリー、アトリエシャテーニュ

併催イベント

・写真展開催記念トークイベント「2023-2011あれから」
2023年10月10日(火) 18:00〜19:30
ゲスト:インディペンデント・キュレーター/東京工芸大学 芸術学部教授 菅沼比呂志氏
・広川泰士氏によるギャラリートーク「定点観測で見えてくること」
2023年9月23日(土・祝)・30日(土) 13:00〜13:50
9月23日(土・祝) ゲスト:写真家 熊谷直子氏
気仙沼ファミリープロジェクト主宰 菊田千詠氏
・動画上映「家族編」「風景編」

販売物

・『STILL CRAZY』(光琳社)
・『BABEL』(赤々舎)
・『2023-2011 あれから』(Place M)

主要メディア掲載

写真・カメラ紙(誌):CAPA(9月20日)、デジタルカメラマガジン(9月20日)、フォトコン(9月20日)/Web:Ameba News、Infoseek ニュース、エキサイトニュース、OVO、gooニュース、グノシー、BIGLOBEニュース、mixiニュース、Yahoo!ニュース

来館者数

合計17,863人(21日間)

実施レポート

震災という難しいテーマの写真を、来館者にどのように見てもらうべきか——本展では、232点もの「定点観測」の写真を、ランドスケープとポートレート、それぞれの訴えるものがよりよく伝わるよう、異なる見せ方で展示しました。ランドスケープの写真は、広川氏が8×10インチサイズのネガカラーフィルムで、同じ地点で定点観測的に撮影し続けた(コロナ禍の3年間を除く)9枚の写真を横一列に並べることで、風景の変遷を詳細にたどれるようにしました。

また、ポートレート写真は、広川氏が津波で家族の写真を失ってしまった方々に家族写真をプレゼントするために毎年30〜50組の家族をデジタル写真で撮影し、その中からセレクトしたプリントを、後日家族に送っているものです。大変な状況の中でも、家族がそろってカメラの前に立つと自然と笑顔になってしまう——撮影では、そんな“写真の力”を広川氏自身が改めて感じたといいます。本展では、20家族以上のポートレートを年ごとにまとめてプリントし、展示室内のスペースに設置したボードにランダムに配置しました。小さな子が中学生になっていたり、家族が増えていたり、12年間の年月を感じる展示となりました。

会期中、気仙沼など被災地出身の方も含めて多くの方々に来館いただきました。瓦礫が撤去され、更地となっていく変化の著しい震災直後と、コロナ禍の中で変化が鈍ったここ数年の対比が見て取れるランドスケープ。被災地に暮らす家族の年輪や、運命を受け入れ毅然と生きる力強さが感じられるポートレート。対照的な記録を目の当たりにした来館者からは、巨大なコンクリートによる無機質な「復興」への複雑な思いが寄せられる一方、家族たちの笑顔に救われた気持ちになったという声が聞かれました。広川氏へのメッセージが海外の方を含む幅広い年代の方々から寄せられるとともに、本展を目的に訪れた来館者の95%が「また来たい」と回答するなど、「復興とは何か?」を問い続ける広川氏の思いは、多くの人々の心に響きました。

来館者の声

3.11からの皆さんのポートレートに、胸がいっぱいになり、もう一度見たくて最終日にも来ました。人間がかけがえのない存在であること、そして人間が強いことを強く感じました。

家族写真がすごく生き生きしていて、一人ひとりが自然な、とってもいい表情で写っているのを見て、ずっと涙が止まらなかったです。

気仙沼出身者です。広川さん独自の視点で切り取られた気仙沼の風景がとても心にしみました。

復興のあり方を考えさせられました。苦しい中でも懸命に生きる家族の絆を鮮明に収めた黒白写真に勇気づけられました。

この記憶を後世に伝えていかなければと思いました。写真が果たせる役割は大変大きいと感じます。

定点で撮り続けている作品を拝見していると、瞬時にタイムスリップすると同時に、1日1日を大切に生きていかなければと強く感じました。

気ままなボス猫『ケンジ』
～ 猫フォトの撮り方・魅せ方教えるべや ～

2023年5月26日(金)ー6月8日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース2

北海道・小樽で生きる猫たちの姿を撮り続ける写真家・土肥美帆氏。近年は、どっしりした大きな体と人間のような味わい深い表情が魅力の“ボス猫・ケンジ”を追い続けて撮影。その写真を投稿しているインスタグラムのアカウントは、フォロワー8万人を超えるほどの人気を誇ります。本展は、漁師町の人々や仲間の猫たちと気ままに暮らすボス猫・ケンジの姿を土肥氏が捉えた作品50点を展示。SNSの世界を中心に、その愛くるしさと思わず笑ってしまうような面白さとで多くの人の心を魅了してきたケンジの様子を、大迫力の銀写真プリントで生き生きと表現しました。

併せて、猫たちの自然な表情と個性を見事に写真に収めてきた、土肥氏ならではの撮影テクニックをまとめたパネルも展示。猫たちと信頼関係を築く方法や、彼らを魅力的に写す方法などを、豊富な解説写真とともに、イラストのケンジが北海道弁で楽しく紹介しました。土肥氏と来館者が語り合う会場は和気あいあいとした雰囲気に包まれ、会期中に開催した2回のギャラリートークはいずれも大盛況となりました。館内アンケートでもその94%が「よかった」と回答。幅広い年代の方々からご好評をいただきました。

展示作品点数
50点

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
企画:富士フイルムビジネスエキスパート株式会社
デザイン:株式会社CCG C.REP
プリント制作:プロラボ クリエイト

併催イベント
・土肥美帆氏によるトークイベント
テーマ「猫フォトを撮るコツ、ワンポイントアドバイス」
2023年5月26日(金)・6月3日(土) 14:00～／16:00～
5月27日(土) 14:30～／16:00～ ※各回約30分

販売物
・写真集『北に生きる猫』(河出書房新社)
・『みんなケンジを好きになる』(河出書房新社)
・缶バッジ、ステッカー、キーホルダー、アクリルスタンド、ポストカード
※写真展期間限定で、土肥氏が『ケンジ』の作品で制作し、富士フイルム直営のWONDER PHOTO SHOPのオンラインストアを活用して販売したフォトグッズ(トートバッグ、クッション、Tシャツ、マグカップ)も好評を博し、写真をカタチにして楽しめる商品として多くのお客さまの注目を集めました。

来館者数
合計15,415人(14日間)

来館者の声

普段SNSで見ているケンジが大きな写真でさらにかわいらしく迫ってきて、写真の力に心を打たれました。

ギャラリートークが楽しく2回とも参加。トークと写真から土肥さんのケンジに対する愛が伝わってきて、泣きそうになりました。

猫の撮り方のコツが初心者にも分かりやすく説明されていて、参考になりました。とても良い展示でした。

石川賢治 宙(ソラ)の月光浴 SPECIAL SELECTION

2023年12月1日(金)ー12月21日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

年に12回しかない満月。その前後を含む3日間の晴天の夜にしか撮影できない「月光写真」のパイオニアが、石川賢治氏です。石川氏は1984年から満月の光だけで撮影する“ランドスケープ月光写真”に取り組み、1990年に初の写真集『月光浴』で大きな注目を浴びました。本展では、石川氏が2005年から7年間にわたって世界の秘境を巡り、2012年に発表した壮大な作品シリーズ『宙(ソラ)の月光浴』から特別にセレクトした作品を展示しました。

石川氏は、地球規模の風景と満天の星がある場所を求め、イグアスの滝(ブラジル・アルゼンチン)、ウユニ塩湖(ボリビア)、太古の姿を伝えるバオバブの樹(マダガスカル)、ガラパゴスの化石的動植物(エクアドル)などの姿が月光に浮かび上がる風景を、富士フイルムのカラーリバーサルフィルム「フジクローム」を使い長時間露光で撮影。それを当時最高峰の銀写真プリント「フジクロームRPプリント ダイレクト クリスタル」に仕上げた作品群から、石川氏本人が15点を厳選しました。石川氏が独自に研究を重ねた露光方法で生み出される神秘的な青の世界。「フジクロームRPプリント」の優れた保存性により、当時のままの鮮やかな色を来館者に体感いただくことができました。

周囲を遮光し照明の明るさも落とした会場では、ナチュラル・サウンドアーティストの中田悟氏が石川氏の満月の夜の撮影現場で録音した自然音を流し、ゆったりとご覧いただけるようベンチも設置。幻想的な世界に没入しながら作品に見入る来館者の姿が印象的な写真展となりました。

展示作品点数
15点

クレジット
主催:富士フイルム株式会社　デザイン:宮坂淳
ナチュラル・サウンドアーティスト:中田悟
プリント制作:フォトグラファーズ・ラボラトリー

販売物
- 『月夜の晩に』(小学館)
- 『宙の月光浴』(小学館)
- ポストカード8枚セット

来館者数
合計28,010人(21日間)

来館者の声

写真の迫力がすごかったです。独自の世界観に魅了されました。

美しいブルーが神秘的でいつまでも見ていたいと思いました。

地球にこのような景色があるのかと感じ入りました。

空撮写真家 山本直洋写真展「そらをとびたい」
～空、大地、地球を感じて。～

2024年2月9日(金)－2月29日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

山本直洋氏は、モーターパラグライダーに乗って空を飛び、自ら飛行操縦をしながらシャッターを切る空撮写真家です。「空を飛びたい」という夢を叶えるべく空撮写真家となり、「全身で自然の大地を感じたい」という思いに突き動かされ、国内外で数多くの空撮を手掛けてきました。風やエンジンの影響を大きく受けるモーターパラグライダーでの撮影は、高い操縦技術と判断力が必要不可欠。時に地上5,000mという厳しい条件の中で大自然の一瞬を切り取った写真は、まさに奇跡の一枚といえます。

本展では、山本氏が2,000～5,000mの上空から大地を撮影した、“地球を感じる写真”を厳選。山本氏が2019年より挑戦を続けている、世界七大陸の最高峰を空撮する「Above the Seven Summits Project」から、アフリカ大陸のキリマンジャロとオーストラリア大陸のスノーウィーマウンテンズの写真も初展示しました。これらのダイナミックな眺望を大判の銀写真プリントで鮮やかに表現。さらに、富士山や秋田駒ヶ岳の全景写真の壁面展示に合わせ、会場の床面に、山頂の間近に迫って眼下を捉えた写真を展示し、没入感を演出。山本氏が一枚一枚の撮影時の思いを語ったギャラリートークも好評を博しました。来館者が感動して涙する姿が見られるなど、山本氏が感じた風や大地の表情、心動かされた自然の美しさを追体験いただけた写真展となりました。

展示作品点数
18点

クレジット
主催：富士フイルム株式会社
協力：株式会社小学館、ロジスティード株式会社
後援：港区教育委員会
企画／デザイン：株式会社ラジアン
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント
・山本直洋氏によるギャラリートーク
2024年2月10日(土)・11日(日・祝)・25日(日)　13:00～／15:00～
2月17日(土)　14:00～／16:00～　※各回約30分

販売物
・『そらをとびたい』(小学館)

来館者数
合計20,331人(21日間)

来館者の声
山本さんが体験したその時の風、空気、感動的な風景が捉えられていて、飛行を疑似体験しているようでした。

作品を見て、「私たちは言葉にできないほど美しい地球に住んでいるんだ」と、感激しました。

「自分の目で見て感動した瞬間を切り取るからこそ、人の熱を感じる写真になる」という山本さんの言葉に、「人にしかできないこと」の素晴らしさに改めて気づきました。

【写真家たちの新しい物語】

上吉川祐一写真展「いのち」

2024年1月19日(金)ー2月1日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース2

兵庫県たつの市に生まれ育った上吉川祐一氏は、ライフワークとして地元の産業を撮影しています。中でも15年以上追い続けているのが、財布やかばんなどを作る皮革産業です。牛が食肉用に加工される際に産出される副産物を用いて牛革製品が制作されている過程を目の当たりにし、「人間は生き物たちに生かされている」という事実に改めて気づかされたという上吉川氏。牛を育てる畜産農家から皮のなめし加工を行うタンナーまで、多くの関係者とコミュニケーションを取りながら取材、撮影をしてきました。

本展は、上吉川氏が丁寧に撮影してきた写真を通して、牛革製品が生まれるまでのストーリーを紡いだ写真展です。これまであまり公開されてこなかった皮革加工の現場で、「いのち」と真摯に向き合う職人たちの姿に迫り、ライティングなど細部にまでこだわり、立ち上る湯気や水しぶきなどとともに丹念に捉えた作品を、大判の銀写真プリントで鮮明に伝えました。「命の尊さや生きる意味について考えさせられた」という声が寄せられるなど、幅広い層の多くの方に感銘を与えた写真展となりました。

展示作品点数

40点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：デジタルカメラマガジン編集部
デザイン：渡部浩
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・上吉川祐一氏によるギャラリートーク
2024年1月20日(土)・21日(日)・27日(土)　14:00～
※各回約30分

来館者数

合計10,866人(14日間)

来館者の声

写真家の思いが作品から伝わってきました。写真を見ていると感動の涙が出てきました。

命をいただいて生きていることを考えさせられました。心が震えました。

牛革製品ができる過程には、いろいろな人の思いや技術が詰まっていることを知りました。貴重な経験になりました。

出展者の声

会期中は、写真家や出版社の方々、芸術大学の先生や学生の方、ファミリー層など幅広い方に写真をご覧いただくことができました。大迫力の銀写真プリントの美しさには私自身、目が釘付けになりました。作品の前で涙する方、命への感謝の言葉を述べる方も数多くおられ、想像以上の反響に私も驚きました。2週間はあっという間でしたが、多くのご意見をいただき気づきや勉強になることばかりで、私のようなまだまだ若手の写真家にとって、とてつもなく貴重な写真展でした。会場の光景は一生私の胸に残り続けると思います。

【写真家たちの新しい物語】小野啓 写真展「私のためのポートレート」
― 全国の高校生のポートレートシリーズ ―

2024年3月8日(金)ー3月21日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1

2002年から日本全国の高校生の肖像をフィルムカメラで撮り続け、多くの若者から支持を受ける小野啓氏。本展は、20年以上続けているこの撮影が新型コロナウイルス感染症の感染拡大により休止された期間を経て、2022年に撮影された作品を一堂に展示した、本シリーズの節目となる写真展です。

「自分自身を写真に残したい」と願う高校生をWebやSNSで募集し、地域を問わず全国へ撮影に赴くのが小野氏のスタイル。事前に応募動機や撮影希望場所などを丁寧にヒアリングし、彼ら・彼女らの思いを受け止めながら一枚のポートレートを形作っていきます。今回の作品は、コロナ禍の自粛期間によって多くの機会が失われた世代の高校生たちが一枚の肖像を求めたリアルを切り取った、時代の記録でもあります。

小野氏が作品一枚一枚への思いを紹介したギャラリートークに若年層が多数参加したり、写真専門学校生がグループで来館したりと、幅広い世代から関心が寄せられたことも本展の特徴です。来館者アンケートでは、本展を目的に訪れた方の90%が「よかった」と答え、98%が「また来たい」と答えるなど、多くの方々の共感を呼ぶ写真展となりました。

展示作品点数
26点

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
後援:港区教育委員会
企画:株式会社青幻舎
デザイン:鈴木成一
プリント制作:写真弘社

併催イベント
・小野啓氏によるギャラリートーク
2024年3月16日(土)　16:00～
20日(水・祝)　12:00～
※各回約30分

販売物
・『私のためのポートレイト』(青幻舎)
・『青い光』(青幻舎)
・『NEW TEXT』(赤々舎)

来館者数
合計13,659人(14日間)

来館者の声

写っている高校生たちの一人ひとりの個性がすごく伝わってきました。

写真を見ていると、写っている高校生と対話しているような感覚になりました。

知らない人たちが写っているのに、なぜか共感してしまうような写真でした。

出展者の声

長年にわたり撮り続けてきた作品が、多くの方々の目に触れる機会をいただけたことに感謝しています。日々の地道な作品制作の中、この写真展はまさに晴れ舞台だと感じます。写真展示のプロの皆さんとプリントや額装、展示レイアウトなどのプランを納得のいくまで話し合うことで、作品を心から満足のいく形で発表することができました。そして、本展をきっかけに念願の写真集の出版へとつながったことが、写真家として最も大きな出来事でした。海外からの来館者も予想以上に多く、新鮮な反応と感想とに接することができたことが今後海外への展開を目指す上でも貴重な経験となりました。

ポートフォリオレビュー／アワード 2023

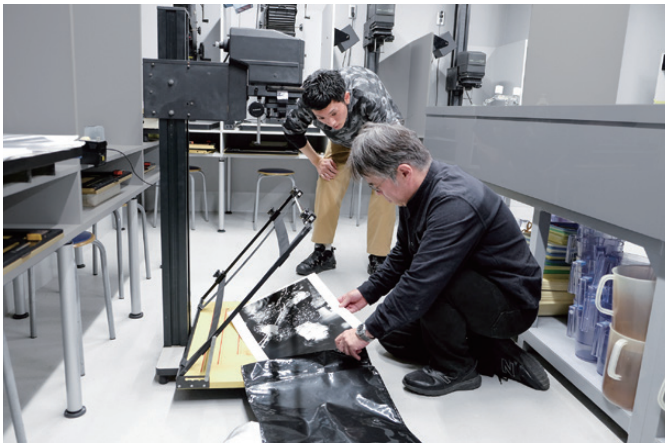
2024年3月22日(金)ー4月11日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2

開催の経緯

「ポートフォリオレビュー/アワード」は、45歳以下の写真家および写真家を志す方から作品を募集し、プロ写真家による作品講評会（ポートフォリオレビュー、以下レビュー）で作品についてアドバイスをいただき、優秀な作品の写真家に個展開催の機会を提供するという企画です。富士フイルムが運営する若手写真家応援プロジェクトの一環として開催しました。

2023年度のレビュワー（講評する講師）を務めたのは、浅田政志氏、GOTO AKI氏、中藤毅彦氏、野村恵子氏の4名です。

事前審査を通過し一次選考の対象となった48名の中から、2023年8、9月に計2日間にわたり実施された選考で、ファイナリストレビュー 最終選考会へと進む12名が選出されました。そして、10月の最終選考会でアワード受賞者4名が決まりました。



1. 講評会・選考会

■ポートフォリオレビュー　一次選考会
2023年8月26日／9月2日

2023年4～6月に実施した作品募集に対し、全国から定員を大きく上回る応募をいただきました。その中から、レビュワー4名による審査を行い、通過した48名に対し、オンラインでレビューを実施。12名をファイナリストとして選出しました。

■ファイナリストレビュー　最終選考会
2023年10月7日

12名のファイナリストたちが、前回のレビューのアドバイスなどを生かしてブラッシュアップした作品に対して、レビュワー4名がより深く個別にアドバイスを行いました。参加者とレビュワーとの熱い対話が、各人のその後の作品制作のレベルアップにつながる良い機会となりました。

そして10月20日、ファイナリストの中から、レビュワーが1名ずつを推薦し、アワード受賞者4名をWebにて発表しました。

2. 写真展開催までの準備

アワード受賞者4名は、富士フイルムフォトサロンでの個展開催に向けて、各推薦写真家と企画者から作品や展示に関するアドバイス、富士フイルムから制作に関する各種サポートを受けました。

具体的には、作品のセレクトや構成、編集、銀写真プリントや色校正、告知物・展示物の制作、告知作業、搬入作業などについて、多岐にわたる専門的なアドバイスや支援が行われました。受賞者たちは初体験の連続に試行錯誤しながらも、推薦写真家や多くの関係者とのコミュニケーションを通じて、学びや発見、インスピレーションを得て、自らの創造性を発揮し、個展を実現させました。

出展者の声（写真展開催までの準備について）

【加藤卓氏】
野村先生から自分の視点を超えたアドバイスをいただき、作品に磨きをかけていくことができました。写真展が多くの方々の力で成り立っていることを知り、写真家やスタッフの皆さまへのリスペクトが高まりました。

【松永誠氏】
他の参加者の多様な作品を見たり、先生方の視点や意見を知ることができ、とても貴重な経験でした。暗室作業やレイアウト決めの際に中藤先生から受けたアドバイスは胸に刺さるものばかりで、今後の制作の基盤となりました。

【minachom氏】
浅田先生のレビューでは、認識していること、気付いていなかったこと、両方について胸に響くコメントをいただきました。展示において鑑賞者を飽きさせないための工夫を盛り込むなど、見る側の視点に立つことを学び、大変勉強になりました。

【茂木智行氏】
GOTO AKI先生より、展示構成からタイトルやキャプションの表現方法まで、一からご指導いただきました。初めてのことで苦労もありましたが、先生に根気強くお付き合いいただき、今後の写真人生を築く糧となりました。

ポートフォリオレビュー／アワード 2023

2024年3月22日(金)ー4月11日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2

展示概要

本展では、本アワードを受賞した4名の出展写真家と、彼らを推薦したプロ写真家とのやりとりによりブラッシュアップされた作品群を、両者のコメントと共に展示しました。陽の光を強調することで何気ない景色を印象的に表現した風景写真、都市に点在する人工物の存在感を白黒のコントラストで描写したモノクロ写真、身近な人物の日常をユーモアと独自の視点で切り取ったスナップ、異国のエネルギーを色鮮やかに収めたストリートフォト。オリジナリティあふれる作品を通して、来館者が新たな写真表現に出会う機会を提供しました。

～レビュワー 中藤毅彦氏の言葉～

選考には非常に悩まされた。いわば異種格闘技のトーナメント戦のようであった。ジャンルの重なる同系統の作品同士であれば、比較的容易にその優劣を判断できる。しかし、集まった作品の多くが全く異なっており、それぞれに存在感を発しているのだ。作家本人の熱気を帯びたプレゼンテーションと対話を経て、オリジナリティあふれる作品群を前に、途方に暮れるばかりであった。誰がアワードを受賞しても不思議ではない個性派の作家がひしめき合う中で、紙一重の差で当落が決まったと言っていいだろう。最終的に4名に絞られた際の決め手は、「未知数の伸びしろ」にあった気がする。

このアワードの特色のひとつに、推薦作家と企画者のサポートによる、受賞から写真展開催までのプロセスの重視がある。そのため、応募作品だけではなく、展示プランや作品内容を練り上げる中で成長していく姿まで見据えて考えなくてはならない。写真作家としての潜在的な力をどこまで伸ばすことができるのか、その見極めも審査の重要なポイントであった。

実際に受賞から展示までの期間で、ある者は再び海外へ撮影に向かい、ある者は一から暗室作業を学んだことで、さらに作品の完成度を増していった。今回のアワードでは、審査から展示までの過程を詳細に記録した動画もまとめられている。われわれ審査員にとっても選考は終着点ではなく、むしろスタートラインとして、共同作業の中で新たに彼らとの関係を築いていった。そうしたプロセスが映された動画もぜひご覧いただきたいと思う。

(ポートフォリオレビュー/アワード 2023 総評より)

出展写真家および展示作品点数

Vol.1 加藤卓　73点　　Vol.2 松永誠　27点
Vol.3 minachom　51点　　Vol.4 茂木智行　28点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社
企画／運営協力：デジタルカメラマガジン編集部、株式会社コンタクト
デザイン：長尾敦子
プリント制作：
Vol.1.3.4　プロラボ クリエイト
Vol.2　松永氏(小全紙、大四切サイズ) 暗室協力：日本写真芸術専門学校
写真弘社(A0、A1サイズ)

併催イベント

・浅田政志氏&GOTO AKI氏&中藤毅彦氏&野村恵子氏によるトークショー
2024年3月23日(土)　13:30～15:00
・松永誠氏×中藤毅彦氏&茂木智行氏×GOTO AKI氏によるギャラリートーク
2024年3月30日(土)　13:30～14:30

販売物

・minachom『タンパンオトコ・タイワン』

来館者数

合計19,181人(21日間)

受賞者発表動画

実施レポート

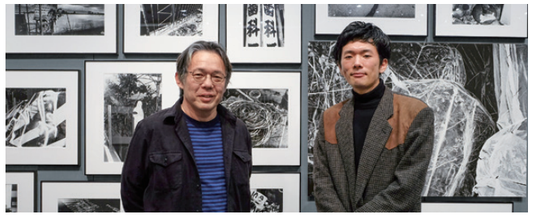
若い写真家の成長を、作品選びから写真展の開催までプロ写真家が丁寧に寄り添い応援するという本展の取り組みに、多くの来館者から賛同の声をいただきました。各出展写真家によるギャラリートークでは、和やかな雰囲気の中、撮影の苦労や展示の工夫などについて語られ、その思いの強さや創意工夫の様子に、参加した方々から共感や驚きの声があがっていました。

Vol.1 加藤卓(写真：右)「土と太陽」(推薦写真家：野村恵子)

自身が暮らす街や近郊をフィールドに、いつもと変わらない風景や少しずつ変わっていく風景を見つめ歩き、撮影した加藤氏。日常の情景を切り出した一枚の中で、太陽の光を浴びて立ち上る土の匂いなど、言葉では表しがたい写真ならではの物語を描写。何気ない風景の中に不思議な魅力を放つ作品に、「写真の面白さを再認識した」という来館者が多くいらっしゃいました。

【加藤氏のコメント】…一生懸命に制作した作品を多くの方にご覧いただけたことに喜びを感じました。既存の写真理論に頼りすぎず、自分の素直な気持ちを写真で伝えることの大切さ、そして難しさを実感しました。これからも固定概念にとらわれずに制作を続けていきたいです。

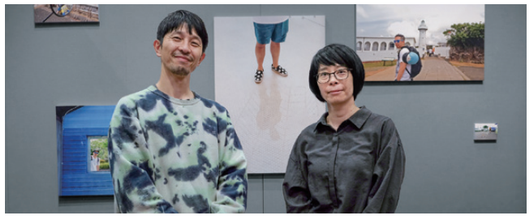
Vol.2 松永誠(写真：右)「I surrender」(推薦写真家：中藤毅彦)



都市の片隅に佇む大小さまざまな人工物を、「境界」という視点で捉え、明暗や濃淡を強調したモノクロ写真で表現した松永氏。人物を排除したストリートスナップにまとめることで、境界物が持つ排他的、閉鎖的な性質を浮かび上がらせました。自ら暗室で露光時間を調整し、階調の細部にこだわって手作りしたその作品は、力強い描写力で来館者を魅了しました。

【松永氏のコメント】…ギャラリートークでは、展示の意図をどんな言葉で伝えるべきか悩み、熟考の末に自分の考えを整理できました。この経験は、創作活動を続ける上で財産になると感じました。そして、お客さまに作品のテーマにまで踏み込んで質問いただけたこともうれしかったです。

Vol.3 minachom(写真：右)「短パン男」(推薦写真家：浅田政志)



身近な人の日常を約10年にわたって撮りため、作品にしたminachom氏。見る人の気持ちを和ませる写真の奥にある独自の視点が評価されました。全ての作品をパネルで並べることで、写真そのものをシンプルに鑑賞できる環境を作り、被写体の生活を垣間見るような視点を演出。minachom氏のユーモアあふれる世界観がつまった会場では、来館者も思わず笑顔になっていました。

【minachom氏のコメント】…来館者の方から「独特の視点が面白い」と声をかけていただけたのがうれしかったです。見る人によって写真の見方が全く異なることにも驚きました。他の受賞者とも在廊時に交流でき、特別な経験ができました。

Vol.4 茂木智行(写真：右)「Scratched Moments」(推薦写真家：GOTO AKI)

インドのコルカタを走る路面電車が織りなす情景を、自身の子ども時代の日常の記憶と重ねて撮影した茂木氏。そこで暮らす人々と、街の文化や喧騒を色濃く描写した写真は、鉄道写真の枠にとどまらない、異国を訪れた感動や興奮が伝わるものばかり。エネルギーに満ちた土地の熱気を感じさせる作品群が来館者の旅情をかきたてました。

【茂木氏のコメント】…大きく引き伸ばしたプリントは迫力があり、展示でしか表現できないものがあると実感しました。これからは、作品として発表した際にどのように伝わるのかを意識して撮影し、見る人に楽しんでいただけるようにしていきたいです。

来館者の声(Vol.1～Vol.4)

Vol.1　行ったことのない街の景色なのに、なぜか懐かしく感じられたのが不思議でした。

Vol.2　日常風景が光と影でカッコよく表現され、写真の面白さを感じました。

Vol.3　日常の生活にあるたくさんの楽しさを再認識しました。

Vol.4　異国の雑踏が伝わる写真に五感が刺激されて、気持ちがとても高揚しました。

GFX Challenge Grant Program 2022
～Make Your Next Great Image～

2023年11月10日(金)ー11月30日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2・3・ミニギャラリー

展示概要

世界各国で活躍するクリエイターの創作活動の支援を目的とする富士フイルム主催の助成金プログラム「GFX Challenge Grant Program」の2回目。今回も全世界から、クリエイティブなアイデアと制作テーマをまとめた撮影企画書を多数ご応募いただきました。地域別での一次・二次選考、外部審査員を招きグローバルで実施した最終選考まで3カ月をかけ、2023年3月に受賞15企画を決定。受賞企画の制作活動のサポートとして、富士フイルムから、「Global Grant Award(大賞)」受賞者5名に10,000ドル相当、「Regional Grant Award(優秀賞)」受賞者10名に5,000ドル相当の助成金を提供しました。さらに制作用機材として、35mm判カメラの約1.7倍となるラージフォーマットセンサーを搭載し、超高画質撮影を可能にしたミラーレスデジタルカメラシステム「GFXシリーズ」を無償貸与しました。

本展では、約5カ月の期間を経て完成した静止画13作品を銀写真プリントで展示し、動画2作品をプロジェクターで上映。異次元の高画質で描かれた、各国の精鋭のクリエイターによるオリジナリティーあふれる作品によって、写真・映像表現の新たな可能性を提示しました。社会的意義が高い活動の様子を記録した作品など、質の高い企画が集まる本プログラムの特徴が前回にも増して表れる写真展となりました。

出展クリエイター

1. Global Grant Award 受賞者
ケイティ・オーリンスキー(Katie Orlinsky)／米国、ホン・チンジュン(Qingjun Huang)／米国、シャロン・カステジャーノス(Sharon Castellanos)／ペルー、デービッド・ガバーレ(David Gaberle)／チェコ、小原一真／日本

2. Regional Grant Award 受賞者
カーリー&ジャレッド・ジャキンス(Carly & Jared Jakins)／米国、エリザベス・モレノ(Elizabeth Moreno)／メキシコ、ダニエル・リンドスコッグ(Daniel Lindskog)／スウェーデン、マデリン・セント・クレア(Madeline St Clair)／イギリス、アグネス・ベレンテス(Ágnes Berentés)／ハンガリー、リディア・マタタ(Lydia Matata)／ケニア、ジャン・マヨ(Jan Mayo)／フィリピン、タニア・マルキン(Tania Malkin)／オーストラリア、ユー・ジア(Yu Jia)／中国、ゾウ・ファン(Zhou Fang)／中国

展示作品点数

207点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社
企画：コンタクト
デザイン：長尾敦子
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・小原一真氏によるギャラリートーク
2023年11月10日(金)　11:00〜11:30／15:00〜15:30／18:00〜18:30

Web公開動画

15作品の写真家によるメイキング動画

来館者数

合計20,162人(21日間)

実施レポート

本展で展示したのは、米国・ペルー・チェコ・日本・メキシコ・スウェーデン・英国・ハンガリー・ケニア・フィリピン・オーストラリア・中国のクリエイターからの15作品です。気候変動の影響でカリブーとトナカイの数が減少する中、北極圏の生態系を守ろうとするカナダ先住民の取り組み。米国のごく普通の家庭にある品々を全て庭先に並べ、住人とともに写真に収めることで、家族や時代の姿を記録したドキュメンタリー。自然界に現れるサインを解読し、天候を予測する知恵を古代から受け継いできたアンデスの農民の暮らし――。社会や環境の可視化に挑む作品や独自のストーリー性を追求した作品の数々が、来館者の心を強く捉えました。

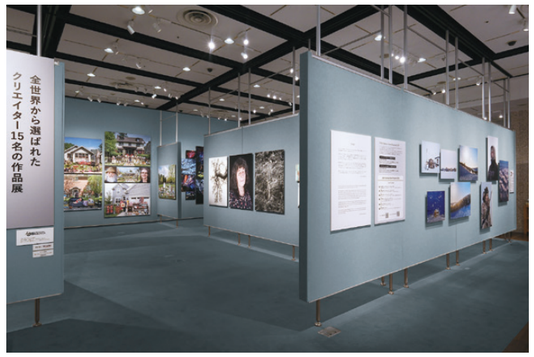
また、「Global Grant Award」に選ばれた小原一真氏の作品「カリバリー島 ー生の記憶を辿る」は、感染症によって差別されてきた人々、関わり合ってきた人々の記憶に焦点を当て、写真・映像・音声の複合的表現で描いたヒューマンドキュメンタリーです。ギャラリートークでは、小原氏本人が撮影プロセスや人々との出会いについて語り、来館者に作品のテーマをより深く理解いただき、現在につながる社会課題に思いを寄せる機会を提供しました。

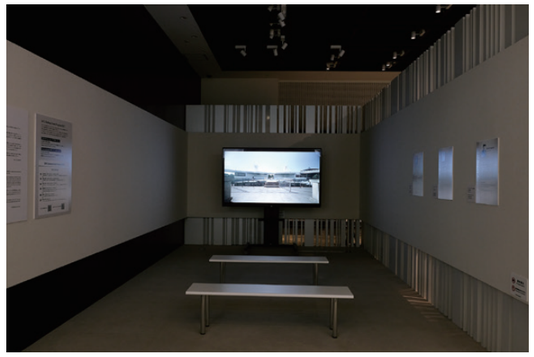
これらの作品はいずれも、豊かな階調表現と浅い被写界深度で立体的な描写を可能にした「GFXシリーズ」の特性を最大限に生かしたものばかり。中でも本展メインビジュアル作品「The Last Reindeer」(Katie Orlinsky氏<米国>)は、巨大なサイズに伸ばしても無数のトナカイ1頭1頭までが克明に描写されています。来館者からは、展示作品の圧倒的な鮮明さと美しさに息をのんだといった声が聞かれました。館内アンケートでは本展を目的に訪れた来館者の94%が「また来たい」と回答するなど、多くの方にご満足いただく写真展となりました。

優れた作品がグローバルに評価される本展は、世界のクリエイターから作品を広く発表する貴重な場として喜ばれ、注目を集めています。今回は初日に受賞者の Daniel Lindskog氏(スウェーデン)、Jan Mayo氏(フィリピン)にも来場いただきました。富士フイルムは今後も本プログラムを継続し、世界の写真文化・映像文化の発展に貢献していきます。

来館者の声

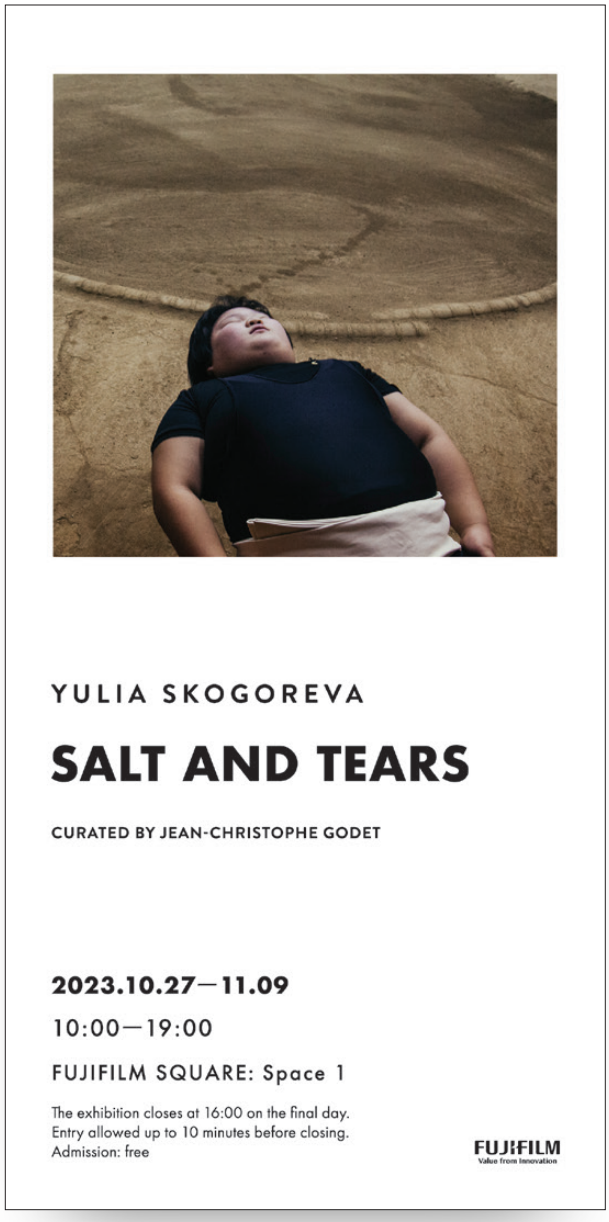
- 世界のいろいろな国の作家の作品を一度に見ることができました。どの作品からもエネルギーを感じ、内容の濃い写真展でした。
- 家族と家と、家の中にあるものを写した作品は、そこから社会や文化が見えてくるようで興味深かったです。
- 鉱物の写真の色彩が神秘的でいつまでも眺めていたかったです。
- 写真と動画が両方あり、写真でしか表せないこと、動画でしか表現できないことがあるのだと感じました。
- 作品を拝見し、自分の中に眠っているクリエイティビティが刺激されるのを感じました。
- クリエイターをサポートするために企画されたということが素晴らしいと思います。





KYOTOGRAPHIE インターナショナル・ポートフォリオレビュー 2023 FUJIFILM AWARD受賞作品 ユーリア・スコーゴレワ写真展「Salt and Tears」

2023年10月27日(金)ー11月9日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1



ユーリア・スコーゴレワ氏は、モスクワ大学で日本学を専攻しながら舞踏家の通訳を務める中で、舞踏のユニークな芸術形態に魅了されたことがきっかけとなり、芸術的なビジョンをベースとした写真家活動をスタート。2011年に来日し、東京を拠点に作品を撮り続けています。

本展は、新進写真作家の作品発表の場「KYOTOGRAPHIE インターナショナル・ポートフォリオレビュー 2023」で「FUJIFILM AWARD」を受賞したスコーゴレワ氏の作品「Salt and Tears」を展示。同氏独自の視点で、女子相撲を取り巻く環境や、女子力士たちの苦悩と葛藤に焦点を当てた写真展です。

2019年に開催された「わんぱく相撲女子全国大会」で、当時小学校6年生の阿部なな選手に出会い、相撲にかけるその情熱に惹かれたスコーゴレワ氏。以来、阿部選手の地元・新潟県新発田市に通い、その姿を追い続けてきました。本展では、相撲に取り組む阿部なな選手の稽古や試合の様子に加え、家族などとのプライベートを捉えたスナップも展示。スコーゴレワ氏の目を通して多面的に記録された阿部選手の姿から、女子力士としての生き様や強い意志、さまざまな苦悩や葛藤、そして支え合う家族の絆を伝えました。

11月3日には阿部選手ご本人が来館。にこやかな表情で展示をご覧になり、スコーゴレワ氏と共に来館者との交流も楽しんでいました。

出展写真家

ユーリア・スコーゴレワ
キュレーター:ジャン・クリストフ・ゴデ
デザイナー:オルガ・ゲラシム

展示作品点数

44点+チェキプリント™40点

クレジット

主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

来館者数

合計17,227人(14日間)

来館者の声

写真から阿部選手の情熱が強く感じられました。女子相撲についてあまり知りませんでしたが、応援したいと思いました。

凛とした阿部選手の姿が印象的でした。写真展の会場全体がカッコいい空間でした。

練習やプライベートの姿から、阿部選手の女子相撲にかける思いが伝わってきました。

東京会議の写真幸福論

2023年12月22日(金)ー12月28日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

富士フイルムは、多くの方がスマートフォンで写真を撮影し、クラウド上にそのデータを保存している時代に、「写真プリント」が持つ価値に改めて注目した「写真幸福論プロジェクト」を2023年8月より展開しています。これは、写真を撮る・プリントする・飾る・贈るなどのプロセスによって、人々が感じる「幸せ」を共有し、増幅・伝播させていくことを目指すものです。今回、BSフジのテレビ番組「小山薫堂 東京会議」の人気企画で、小山薫堂氏、松任谷正隆氏、ハービー・山口氏で構成される「東京会議写真部」において、本プロジェクトとの連動企画が実現(2023年12月10日放映)。「自分がいま最も撮りたい“幸せ”」をテーマに、それぞれに写真を撮影いただきました。

本展では、本企画のために撮影された3名の作品群を銀写真プリントにして展示しました。小山氏は沖縄県で唯一残る銭湯を長年にわたり守る仲村シゲさんと常連さんとの笑顔の写真を撮影。松任谷氏は心の中の幸せな思い出の一瞬を写真で表現。山口氏は20数年前に撮影したご自身の家族の写真を同じ場所で撮影し、変わらない家族の幸せを伝えました。来館者からは三者三様の写真それぞれに共感の声が寄せられ、 写真プリントを通して“幸せな思い”を分かち合う喜びを感じていただく機会となりました。

©小山薫堂

©松任谷正隆

©ハービー・山口

小山薫堂氏のコメント

『常連さん』

沖縄県に唯一残る日本最南端の銭湯「中乃湯」。
その湯を守る仲村シゲさんは何と91歳。
湯沸かしから清掃まで、たった一人で運営しています。入浴料は370円。
一日の客はせいぜい十数人。
それでも仕事をやめないのは、友だちのような常連さんたちがいるからです。
中には趣味の三線を持ってくる人もいます。
風呂上がりに演奏すれば、シゲさんも踊り出してささやかな宴が始まります。
この日は、シゲさんの記念写真を撮影すると聞きつけた常連さんたちが大集合。
いい湯に浸かると自然と顔もほころびます。
その笑顔は、シゲさんに贈られた幸せの花束のように見えました。

松任谷正隆氏のコメント

『晩 秋』

今回は幸せの重さについて考えてみました。
僕も年齢とともに感性は鈍化し、心が動きにくくなっているのを感じます。
経験のストックが多いのも心を動きにくくさせています。
だからこそ、見つけた幸せは本当に貴重なものであり、一生心の中に残しておきたいと思うのです。
幸せは人それぞれの、ほんの気まぐれに感じるもの。
でも誰もが言いますよね。
死ぬときまで持って行けるものは思い出だけだ、と。
そんな一瞬を写真に収めてみたいと思いました。

ハービー・山口氏のコメント

『幸せなTIMEGRAPHY』

本来「PHOTOGRAPHY」とは、光が描く絵という意味です。
この企画をいただいたことで
「TIMEGRAPHY」、
つまり時間を描く絵という新語を思いつきました。
私の息子たちを写した20数年前の写真が残っていたことで、
同じ場所を訪れ現在の姿を撮影しました。
こうした時間経過を得たことで、時代の変化と家族の幸せが写った「TIMEGRAPHY」が出来上がりました。
20年後がまた楽しみです。

出展クリエイター

「東京会議写真部」
小山薫堂、松任谷正隆、ハービー・山口

展示作品点数

22点

クレジット

主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

来館者数

合計5,600人(7日間)

来館者の声

会場に飾られた写真には私の知らない人が写っているのに、なぜか懐かしい感じがしました。

写真を見る時間は幸せな時間だと気づきました。家族の写真をいつも見られるようにして幸せな時間をもっと増やそうと思います。

身近にある幸せを再認識しました。私も日常にある幸せを写真に撮ってみます。

セルカン・ギュネシュ写真展「WITHIN」

2024年2月2日(金)ー2月15日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース2

1980年にトルコで生まれ、2000年にスウェーデンに移住したセルカン・ギュネシュ氏は、野生動物をテーマとした写真の分野で最も権威のある賞の一つであり、18〜26歳の若手写真家を対象とした「エリック・ホスキング賞」をスウェーデン人として初めて受賞した写真家です。

ギュネシュ氏がその美しさに魅せられ、首都ストックホルムから移り住んだのが、手つかずの自然が残る北極圏のラップランド地方。壮大な自然の風景を際立たせるのは、真夏の白夜の大気の輝きや真冬の薄明かりといった、北極圏の独特な光です。本展では、ギュネシュ氏が富士フイルムのラージフォーマット デジタルカメラシステム「GFXシリーズ」でラップランドの稀有な自然の美しさを撮影した作品を展示。8つの季節を持つというラップランドの風景が移り変わる様子を、マット調の銀写真プリントで克明に伝えました。

地平線から差し込んだ光が、夕暮れから夜明けまでの間に凍った世界を淡紅色・深紅色・紫色・青色へと染めていく様子など、同氏が大切にしている風景が作品一枚一枚に繊細に表現されており、多くの方が感じ入ったように鑑賞していました。また、立体感を大切にし、前景・後景ともしっかりと捉えるギュネシュ氏の写真表現に着目する声も多く聞かれました。来館者が撮影方法についてギュネシュ氏に質問したり、互いに楽しそうに語り合ったりしていたのが印象的でした。

展示作品点数
20点

クレジット
主催：富士フイルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント
・セルカン・ギュネシュ氏によるギャラリートーク
①2024年2月2日(金)　15:00〜15:30／17:00〜17:30
②2024年2月4日(日)　13:00〜13:30／15:00〜15:30
③2024年2月7日(水)　15:00〜15:30／17:00〜17:30

来館者数
合計13,048人(14日間)

来館者の声

写真なのに絵画のようでした。景色がきれいで素晴らしく、スウェーデンに行きたくなりました。

日本の自然写真の撮り方と違っていて興味深かった。ギュネシュ氏が撮影した日本の風景を見てみたいです。

14 写真家 ニコラ・ダティッシュ写真展「芸を継ぐ者〜Inheriting the House」

2023年4月14日(金)ー4月27日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

展示作品点数
20点

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

来館者数
合計11,477人(14日間)

日本に在住し、フランスの報道機関をはじめ欧州の新聞社・大手出版社からの撮影・取材要請に応えてきたフランス人写真家ニコラ・ダティッシュ氏。本展は、ダティッシュ氏が福島県会津若松市の東山温泉にある置屋「花の家」の三代目芸妓である渡辺真衣氏を、3年半にわたり「FUJIFILM Xシリーズ」および「GFXシリーズ」で撮影した作品を展示しました。芸妓文化といえば多くの人が京都を連想しますが、ニコラ氏は、人口流出の加速に直面する地方の花街で受け継がれる芸妓文化に着目。渡辺氏の祖母が前世紀に築いた「花の家」に誇りをもち、芸妓として母の教えを守ることに使命感を抱く彼女の姿に迫りました。報道の最前線で活躍するダティッシュ氏ならではの視点で、渡辺氏の公私にわたる姿を捉えた20点の銀写真プリントを通して、家業を守り花街の伝統を残そうと奮闘する一人の女性の生き様を伝えました。

15 FUJIFILM Xシリーズ作品展「夜と光」

2023年4月28日(金)ー5月11日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

写真家は、何の変哲もない光景から光と影を見つけ、それを美しく描き出す芸術家ともいわれます。本展は「夜」をテーマに、暗闇に浮かび上がる街灯りやイルミネーション、その下で見られる人間模様などを、5軸・最大7.0段のボディ内手ブレ補正機能を持つミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM X-H2」「FUJIFILM X-T5」で繊細に捉えた17点の作品を展示。夜に彩られた光の芸術を来館者にお楽しみいただきました。

展示作品点数
17点

来館者数
合計13,458人(14日間)

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

16 FUJIFILM Xシリーズ作品展「Not only Landscape」

2023年5月12日(金)ー5月25日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

SNSの普及に伴い、縦位置で撮影した写真を多く目にするようになりました。横位置写真は広がりのある風景などの撮影に最適な一方、縦位置写真には、奥行きや遠近感、さらには被写体を強調し臨場感を演出する力があります。本展は富士フイルムのミラーレスデジタルカメラ「Xシリーズ」を使って縦位置で撮影したスポーツや自然・都市の風景などの作品を通じ、躍動感や迫力にあふれる縦位置写真の魅力を伝えました。

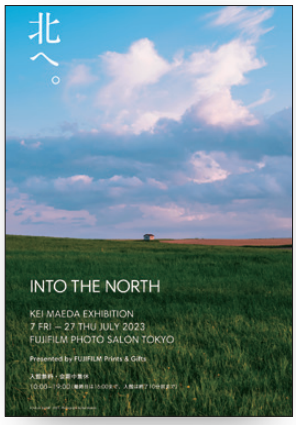
展示作品点数
17点

来館者数
合計12,035人(14日間)

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

17 前田景 写真展 INTO THE NORTH presented by FUJIFILM Prints & Gifts

2023年7月7日(金)ー7月27日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3



アートディレクター、フォトグラファーとして活躍する前田景氏は、祖父であり風景写真家である前田真三氏の写真ギャラリー「拓真館」のリニューアルプロジェクトのため、2020年に北海道・美瑛に移住。自身のライフワークとして美瑛一帯の風景を写真に収めています。本展は、前田氏が美瑛の自然風景をラージフォーマットミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX50S II」「FUJIFILM GFX100S」で撮りおろした作品で構成しました。青みがかった山々、風に揺れる麦の穂、白樺の並木道、霧の中へ続く散歩道、黄金色に輝くカラマツ――。その全てを、豊かな階調と自然で鮮やかな色再現を実現する高品質の銀写真プリント「プレミアムプリント」で展示。前田氏独自の視点で切り取った美瑛の自然の美しさを、来館者に存分に堪能いただく写真展となりました。

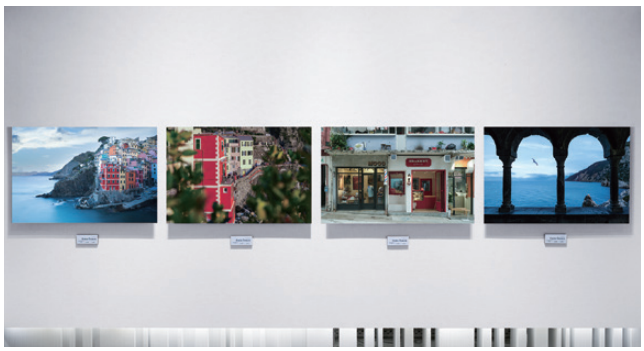
展示作品点数
26点

クレジット
主催:富士フイルムイメージングシステムズ株式会社
プリント制作:富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

来館者数
合計19,637人(21日間)

18 FUJIFILM Xシリーズ 新製品 X-S20作品展「Explore the Unseen World」

2023年5月26日(金)ー6月15日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3



旅の相棒としての要求に応えるカメラ。旅の負担を軽くする軽量性、夜景撮影の際にも正確に動くオートフォーカス機能、動画も撮影でき、省電力で電池残量を気にさせない性能、そして、見たもの全てを記録する高画質。これらを備えたのが「FUJIFILM X-S20」です。本展では、雄大な自然や街角など、多彩な旅の場面を「X-S20」で自由に捉えた作品群を展示。トラベルフォトの新たな可能性を示しました。

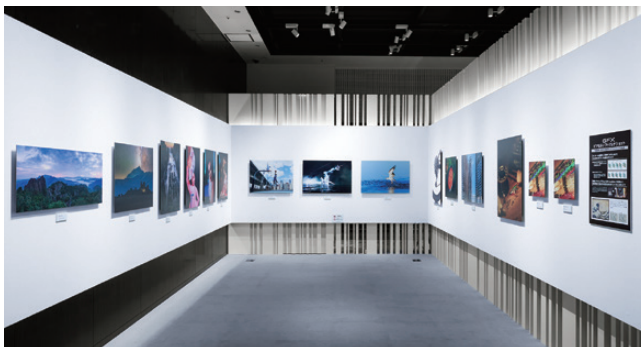
展示作品点数
17点

来館者数
合計21,853人(21日間)

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

19 FUJIFILM GFXシリーズ 新製品 ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX100 II」NEXT STAGE OF LARGE FORMAT「GFX」展

2023年9月22日(金)ー10月12日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3



ラージフォーマットセンサーを搭載した富士フイルムのミラーレスデジタルカメラ「GFX シリーズ」。驚くべき解像力と大型センサーならではの立体感で写真表現の可能性を切り開いています。本展はポートレート、コマーシャル、風景写真に加え、AIなど最新技術で高めたフォーカス性能により高速に動く被写体を「GFX」で鮮明に捉えた作品を、大サイズの銀写真プリントで披露。撮影現場の空気感までをも写し込んだような臨場感を多くの方に体感いただきました。

展示作品点数
15点(作例3点を含む)

来館者数
合計17,863人(21日間)

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
プリント制作:プロラボ クリエイト

20 遠藤励 写真展「MIAGGOORTOQ（ミアゴート）」

2024年3月15日（金）ー3月28日（木）
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

遠藤励氏は北極の先住民たちと共同生活を送り、その狩猟生活を記録するプロジェクトを2017年より継続。彼らと信頼関係を築き、その深層心理に触れ、理解する営みの中で作品を撮影しています。本展は、長年の密着生活を最高画質の「FUJIFILM GFXシリーズ」で捉えた迫力あふれる作品で構成。温暖化・近代化で彼らの文化が失われつつあることを憂う遠藤氏の「心の叫び」が込められた写真群が、多くの方の胸を打ちました。

展示作品点数
23点

クレジット
主催：富士フイルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物
- 写真集『MIAGGOORTOQ』
- 写真集『MIAGGOORTOQ』廉価版
- コンセプトブック『Vision quest』
- ポスター3種

来館者数
合計14,053人（14日間）

21 FUJIFILM X100VI 作品展「Timeless Value -色褪せない価値-」

2024年3月1日（金）ー3月14日（木）
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース3

富士フイルムは2011年、当社独自の「ハイブリッドビューファインダー」や直感的な操作性や洗練された美しいデザイン、独自の色再現による高画質を軽量小型ボディで実現した「FUJIFILM X100シリーズ」を発売し、高級コンパクトカメラ市場を切り開きました。本展は世界の第一線で活躍する写真家たちが、最新モデル「FUJIFILM X100VI」を使って、自身の心が動いたさまざまなシーンを捉えた多様な作品を展示しました。被写体をクリアなファインダーで捉える撮影体験、コンパクトボディによる機動性、心地よいダイヤルのクリック感など、「写真を撮る高揚感」で世界中のユーザーを魅了する「X100シリーズ」のゆるぎない価値を伝えました。

展示作品点数
17点

クレジット
主催：富士フイルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数
合計12,515人（14日間）

22 富士フイルム・グリーンファンド 40周年企画「わたしの自然観察路コンクール」受賞作品展

2024年3月8日(金)ー3月28日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 ミニギャラリー

「富士フイルム・グリーンファンド(FGF)」は、富士フイルムが1984年の創立50周年を機に、新たな分野で社会に貢献したいと考え、1983年に創立。民間企業による、自然保護をテーマとした日本初の公益信託です。富士フイルムが創業以来、一貫して大切に守ってきた、きれいな水・空気・緑などの保護を対象に、10億円の資金を拠出し、「自然環境の保全、育成」に関する活動や研究に対して数多くの助成や支援を行っています。その活動の一環として、次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的に、設立当初から継続して開催しているのが「わたしの自然観察路コンクール」です。本コンクールは小中高生を対象に、地域にある身近な自然が観察できる道を“自然観察路”として、そこで出会った自然の魅力を絵地図と作文で表現した作品を募集し、審査・表彰しているものです。毎年、力作ぞろいで応募数も多く、2023年も900点以上もの作品をご応募いただきました。

本展では、2023年にFGFの40周年と富士フイルムグループが90周年を迎えたことを記念し、コンクールの過去10年間の優秀作品40点の絵地図を銀写真プリントにして、作文の一部とともに展示しました。これらの作品には、子どもたちが自らの足で歩いて身近な自然と接し、見て感じて調べたことが、生き生きと自由に、そしてつぶさに描かれています。自然観察・考察を通じて得た視点や気付きはさまざま。自らの発見にわくわくし、自然や生き物の素晴らしさに感動している気持ちも伝わってきます。中には家族と一緒に熱心に観察したり、自然観察を毎年継続していたりする受賞者も。会場でご覧になっている方々は、一人ひとりの熱意が込められた作品の数々に引き込まれ、熱心に鑑賞していました。

本展では子どもたちの作品を通して、人と生き物とのつながり、自然の大切さに改めて思いをはせ、また、近年関心が高まっているSDGsやネイチャーポジティブ(自然を守って回復させること)のために何ができるかを、子どもにも大人にも考えていただくきっかけを提供することができました。

展示作品点数

49点

クレジット

主催:富士フイルム株式会社
企画協力:公益社団法人 日本環境教育フォーラム
後援:公益信託 富士フイルム・グリーンファンド
プリント制作:プロラボ クリエイト

来館者数

合計20,371人(21日間)

来館者の声

40年もの長い間自然保護の活動を行っているのは素晴らしい。これからもぜひ続けてほしいです。

作品を見ていると、若い人が身近な自然を楽しんで観察していることが伝わってきました。

私も散歩のときにもっとよく自然を見てみようと思いました。

ウルトラセブン55周年記念 中西学 写真展「55 years of ULTRASEVEN Inheritance」

2023年10月27日(金)ー11月9日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース2

円谷プロダクションの製作で1967〜68年に放送され、今も多くのファンに愛される特撮テレビドラマ「ウルトラセブン」。本作が2022年で放送から55年を迎えたことを記念して、写真家の中西学氏が円谷プロダクションの監修のもとで当時の特撮シーンを再現、撮影した55枚の写真を、大迫力・高画質の銀写真プリントで一堂に展示しました。

今回、当時より子どもから大人まで多くの人を惹き付けてきたヒーロー「ウルトラセブン」の醍醐味が伝わる特撮シーンを中西氏が厳選。構図や色味にこだわり、最新のLEDライトや画像生成AIも駆使して撮影した見応えのある作品によって、「ウルトラセブン」の新たな魅力を引き出しました。撮影には、富士フイルムが同じく55年前に発売した中判フィルムカメラ「フジカG690」と、ラージフォーマットセンサー採用で圧倒的な描写力を持つ最新ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX100II」を使用。カメラによって異なる表現の幅を来館者に味わっていただきました。

会場は、放映当時を知る方々から近年本作に出会いファンとなった若い世代まで、幅広い層の来館者で賑わいました。また、当時のドラマ撮影で実際に使われたウルトラセブンのスーツを展示したり、本展の作品を堪能いただける限定写真集や写真プリント、カレンダーなどのフォトグッズも展示・販売し、好評を博しました。

展示作品点数
55点

クレジット
協力：富士フイルム株式会社
監修：円谷プロダクション
企画：デジタルカメラマガジン編集部
プリント制作：プロラボ クリエイト

販売物
- ウルトラセブン55周年記念写真集『55 years of ULTRASEVEN Inheritance』
- ウルトラセブン ポストカードブック 中西学（インプレス）
- デジタルカメラマガジン 2023年11月号（インプレス）
- オリジナルプリント
  チェキプリント™／カレンダー／クリアファイル
- 卓上カレンダー
  フィギュア／Tシャツ／パーカー

来館者数
合計17,227人（14日間）

来館者の声

ウルトラセブンの造形美を迫力ある写真で再認識するという、とてもワクワクする写真展でした。

光の加減や編集の仕方で数十年前の雰囲気を再現できる、写真という表現の深さに興味を持ちました。

全ての作品において、ポーズやアングル、背景色から「あれはあの場面をイメージしたものだ!」と分かる素晴らしいものでした。

フジフイルム・フォトコレクション特別展 シリーズ第2弾「写真表現と技法の結晶化」

2023年3月30日(木)ー6月28日(水)
写真歴史博物館

「フジフイルム・フォトコレクション」は、2014年の富士フイルムグループ創業80周年を機に、「写真文化を守る」ことを基本理念として創設した写真コレクションです。幕末から現代までの日本を代表する101人の写真家による歴史的価値の高い作品を1点ずつ収集。日本の写真史と写真界の歩みを伝える稀有なコレクションとして、全国の美術館や博物館などで20回以上の巡回展示を重ねています。

本コレクションの特徴の一つは、いずれも2001年までに撮影された、いわゆるデジタル以前の作品を収集し、初期の写真技法である鶏卵紙や20世紀以降に一般に広く普及したゼラチン・シルバー・プリント、発色現像方式印画など、さまざまな技法で制作された写真群を幅広く収蔵していることです。これらの写真は、フィルムの感度や大きさ、枚数、薬液を使った現像処理など、物理的な制約や困難が多々ある中で、「写真として表現したい、残したい」という写真家の強い欲求と奮闘によって生み出された結晶であり、「モノ」としての写真が制作されてきた過程を示す貴重な資料といえます。

本展は、2021年に開催しご好評をいただいた「師弟、それぞれの写真表現」に続くフジフイルム・フォトコレクション特別展のシリーズ第2弾として、「写真表現と技法の結晶化」をテーマに、本コレクションから精選した20点の作品を展示。技法や年代によって異なる写真表現の多様さを伝えました。

会場では、フィルム写真の独特の質感や色調に目を留める方が多く、デジタル以前の写真の魅力を再発見いただくきっかけとなりました。また、鶏卵紙を使った明治時代の作品の高い解像度に驚かれたり、特定の技法や写真家についてコンシェルジュに熱心に質問される海外の方や若い世代の方が見られたりと、幅広い層の来館者にコレクションの奥深さをご堪能いただくことができました。

出展写真家

伊藤義彦、上野彦馬、岡田紅陽、小川一眞、影山光洋、鹿島清兵衛、木村伊兵衛、今道子、坂田栄一郎、塩谷定好、須田一政、竹内敏信、田淵行男、築地仁、富山治夫、中村征夫、広田尚敬、フェリーチェ・ベアト、前田真三、緑川洋一、三好耕三（五十音順）

展示作品点数

21点　※作品保護のため、5月18日(木)から、展示作品の一部を入れ替え。

クレジット

主催：富士フイルム株式会社　企画：フォトクラシック
後援：港区教育委員会　デザイン：脇野直人

販売物

・『フジフイルム・フォトコレクション』図録
・『フジフイルム・フォトコレクション』図録(コンパクト版)

主要メディア掲載

新聞：東京新聞(東京、茨城、群馬・栃木、埼玉、千葉、したまち、多摩・武蔵野、山手、神奈川、5月31日)／写真・カメラ紙(誌)：フォトコン(3月17日、4月19日、5月19日、6月20日)、隔月刊風景写真(4月19日、6月20日)、CAPA(4月19日、5月19日、6月20日)／その他雑誌：月刊ギャラリー(3月1日、4月1日、5月1日、6月1日)、印刷界(5月17日、6月7日)、Web：Yahoo!ニュース

来館者数

合計81,857人(91日間)

来館者の声

100年以上前の写真を通じて当時の風情を知ることができました。鶏卵紙の品質の高さに驚きです。いつまで見ていても見飽きなかったです。

フィルムで撮影する写真の素晴らしさを若い世代に伝えようとする熱意が伝わってきました。

写真制作の創意工夫の歴史に感動しました。

高橋宣之写真展「鳥の歌 El Cant dels Ocells（オル カン ドルソ セルス）」

2023年6月29日（木）ー9月27日（水）
写真歴史博物館

四国を流れる仁淀川などをテーマとした作品で、今や「水系の写真家」として知られる高橋宣之氏がデビュー前にスペインで撮影した未発表作品を初展示しました。これらの作品は、撮影後50年もの間、高橋氏自身も目にすることなく保管されていた数百カットのモノクロ作品群から、25点を精選したものです。

スペイン内戦から30年を経たフランコ独裁政権末期の1969～1972年、サラゴサ大学への留学生活の中でカタルーニャやバスク地方などを巡り、人々にカメラを向け続けたという高橋氏。内戦の陰りが残りながらも、どこか陽気さを感じさせる人々の素朴なたたずまいや、生気にあふれた子どもたちの表情、街角の何気ない光景を伸びやかに撮影しました。1972年に故郷の高知に帰り、フリーランスの写真家となって以降、自然美、とりわけ「波」を追求し、川の流域や水の生まれる原生林へ没入していく同氏の、意外な原点を垣間見ることができる作品群です。

今回、1977年のスペイン再訪時の撮影分も併せたこれら未発表作品をフィルムから丁寧にデジタル化し、本人監修のもとで初めてプリントしました。歴史の記録としても貴重な今回の作品群の公開は、高橋氏にとっても感慨深かったといいます。会場には、多数の方々が来訪。中には当時の撮影地の近くに住んでいたというスペイン人の方もいらっしゃいました。本展は、50年前の人々の息づかいを再現する「写真の記録性」を広く伝える機会にもなりました。館内アンケートでは、本展を目的とした来館者の95%が「また来たい」と回答するなど、多くの方にご満足いただきました。

展示作品点数
25点

クレジット
主催：富士フイルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：テンポラリー・コンテンポラリー
デザイン：佐村憲一
プリント制作：写真弘社

併催イベント
ギャラリートーク「甦る記憶の風景、50余年前のスペインが今、語ること」
お話：高橋宣之
2023年 8月5日（土）・6日（日）・9月17日（日）・18日（月・祝） 13:00～13:50

販売物
高橋宣之写真集『鳥の歌 El Cant dels Ocells』（テンポラリー・コンテンポラリー）

主要メディア掲載
新聞：毎日新聞（東京、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨、静岡、8月4日／東京、むさしの、多摩、東京川の手、8月29日）／写真・カメラ紙（誌）：隔月刊風景写真（6月20日、8月19日）、CAPA（6月20日、7月20日、8月19日、9月20日）、フォトコン（6月20日、7月20日、8月19日、9月20日）／その他雑誌：印刷界（7月10日、8月21日）、月刊ギャラリー（8月1日、9月1日）／Web：高知新聞、毎日新聞デジタル、グノシー

来館者数
合計93,238人（91日間）

来館者の声

高橋さんの写真が見たくて来館しました。想像どおり素晴らしく、センスが際立っていました。

街角に人の大きな影が並ぶ不思議なポスター写真に惹かれて見に来ました。一枚一枚見入ってしまうほど、高橋さんの写真はすごかったです。

半世紀前の人々の情感が今の私たちに迫ってくる。写真ならではの力だと思います。

生誕90年記念 細江英公作品展
「この写真家の熱量を観よ!」

2023年9月28日(木)ー12月28日(木)
写真歴史博物館

細江英公氏は、戦後日本の写真界の中心的存在として、世界的に高い評価を受けています。細江氏が写真家を目指すきっかけとなったのは、17歳のときに撮影した「ポーディちゃん」が、1951年に開催された富士写真フイルム(現・富士フイルム)主催の「富士フォトコンテスト・学生の部」で最高賞を受賞したことでした。そして、本格的に写真家を目指し、以来、70年以上にわたり第一線で活躍し、教育者としても後進の育成に尽力するなど、日本の写真界を強いリーダーシップで牽引してきました。また、1960年代にアメリカで作品が評価されたことを契機に、欧米の写真文化をいち早く日本に紹介したことでも大きな功績のある細江氏は、今では日本でも当たり前となった、写真家自身が制作し作品として認める「オリジナルプリント」の概念を先駆的に日本へ導入しました。

本展では、細江氏の1950〜70年代の代表的な4つのシリーズから30点を精選し、貴重な「ヴィンテージプリント」(撮影と同時期に制作されたオリジナルプリント)を展示。生へのエネルギーを男女の性によって表現した「おとこと女」(1959-60年)、作家・三島由紀夫をモデルに生と死の耽美を追求した「薔薇刑」(1961-62年)、舞踏家・土方巽との共作で独自の世界を創造した「鎌鼬(かまいたち)」(1965-68年)、男女の肉体を高度な造形に昇華した「抱擁」(1969-70年)。いずれも、細江氏が重要な制作テーマとしていた「人間の肉体」にアプローチした名作であり、写真表現への飽くなき好奇心と探求心、そして底知れない熱量によって創造された、写真表現の究極のかたちといえます。

会期中には、通りがかりに目を奪われて立ち寄り、初めて細江氏の作品に触れたという方から、本写真展を目的に来館し、1〜2時間かけて作品をじっくり鑑賞する熱心な細江ファンまで、幅広い層の方が来場されました。館内で行ったアンケートの結果では、本展を目的に訪れた来館者の96%が「また来たい」と回答。多くの来館者が、写真家・細江英公が写真にかけてきたほとばしる熱量に魅了されていました。

展示作品点数
30点

クレジット
主催:富士フイルム株式会社
協力:東京工芸大学
後援:港区教育委員会
監修:細江英公写真芸術研究所
企画:フォトクラシック
デザイン:脇野直人

販売物
・『フジフイルム・フォトコレクション』図録
・『フジフイルム・フォトコレクション』図録(コンパクト版)

主要メディア掲載
新聞:朝日新聞夕刊(東京、札幌、9月26日)、東京新聞(東京、茨城、群馬・栃木、埼玉、千葉、したまち、多摩・武蔵野、山手、神奈川、12月6日)/写真・カメラ紙(誌):デジタルカメラマガジン(9月20日)、フォトコン(9月20日、10月19日、11月20日、12月20日)、CAPA(10月19日、11月20日、12月20日)、隔月刊風景写真(10月20日、12月20日)/その他雑誌:月刊ギャラリー(10月1日、11月1日、12月1日)、Web:おとなの週末web、Yahoo!ニュース、ぴあエンタメ情報

来館者数
合計97,872人(92日間)

来館者の声
写真の迫力に圧倒され、また、造形美を堪能しました。

ヴィンテージプリントを鑑賞できて、感動するとともに、作品の強烈な個性に驚きました。

三島由紀夫や土方巽という個性あふれる人を撮り、作品を創った才能に脱帽します。

光の魔術師 緑川洋一「瀬戸内のメルヘン」

2024年1月4日(木)−3月27日(水)
写真歴史博物館

本展は、戦後日本を代表する写真作家で、日本写真史における色彩表現の先駆者とされ、「光の魔術師」とも称された緑川洋一の創作世界に迫った作品展です。生涯を岡山で過ごした緑川は、1930年代から歯科医院を営むかたわらアマチュア写真家として活動を開始しました。1950年代になると多重露光、長時間露光、モンタージュ、特殊なフィルム現像、フィルターワークなどの写真技法を駆使し、現実の風景を色彩豊かで幻想的な世界へと昇華。特に、カラーフィルムが一般的でなかった1960年代初頭から色彩表現を意欲的に追求し、類まれな実験精神で風景写真の新境地を開きました。その成果である写真集『瀬戸内海』は、日本写真批評家協会賞作家賞、日本写真協会年度賞などを受賞。その後も風景写真を中心に生涯で70冊以上の写真集を出版しました。

今回は、緑川が「世界のどこよりも一番美しい」と語った瀬戸内海を舞台とした代表作のカラー写真シリーズを中心に、初期のモノクロ作品や晩年の作品までを加えて構成。オリジナルフィルムから最新のデジタル技術で新たに作成した銀写真プリントによって、緑川が写真で描いたメルヘンの世界を鮮やかによみがえらせました。また、本人が画面構想や撮影記録を詳細に書きとめた「撮影メモ」(ノート)も併せて展示することで、その作品世界を立体的に紹介。来館者からは、絵画のように印象的な色彩表現や、創作への情熱に対する感嘆の声が多数寄せられました。

本展はNHK Eテレ「日曜美術館 アートシーン」で紹介されるなど、メディアに多数取り上げられたこともあり、多くの方々が本展を目的に来館。写真評論家の鳥原学氏や作品のモデルも務めた緑川の長女・西瑞子氏、次女・福隅祥子氏によるギャラリートークは、100人以上が参加するほどの大盛況となりました。

展示作品点数
26点

クレジット
主催:富士フイルム株式会社　企画:鳥原学(birds.inc)
後援:港区教育委員会　デザイン:富澤祐次

併催イベント
ギャラリートーク
2024年1月28日(日)13:00〜13:50 鳥原学氏
2024年2月17日(土)13:00〜13:50 鳥原学氏
2024年3月3日(日)13:00〜13:50 鳥原学氏、緑川洋一長女・西瑞子氏、次女・福隅祥子氏

販売物
・『フジフイルム・フォトコレクション』図録
・『フジフイルム・フォトコレクション』図録(コンパクト版)

主要メディア掲載
テレビ:「日曜美術館 アートシーン」NHK Eテレ(3月3日)/新聞:朝日新聞夕刊(東京、札幌、1月23日)、東京新聞(東京、茨城、群馬・栃木、埼玉、千葉、したまち、多摩・武蔵野、山手、神奈川)/写真・カメラ紙(誌):隔月刊風景写真(12月20日、2月20日)、CAPA(12月20日、1月19日、2月20日、3月19日)、デジタルカメラマガジン(12月20日)、フォトコン(12月20日、1月19日、2月20日)/その他雑誌:月刊ギャラリー(1月1日、2月1日、3月1日)

来館者数
合計77,319人(84日間)

来館者の声

光と影、色彩などが絶妙なバランスできれいに表現されており、素晴らしかった。

光の変化をこのように表現できる写真家がいらっしゃったことに驚きました。

素晴らしい色彩にまず目を奪われました。そして、見ているうちになぜか懐かしさが湧き上がってきました。

銀写真の奥深さに心魅かれました。

■富士フイルムフォトサロン 東京・ミニギャラリー／開催写真展 計72本(当社が主催・協力する企画展29本、公募展43本)

第20回 港区観光フォトコンテスト2022	2023年4月7日(金)～5月4日(木・祝)
「第61回 富士フイルムフォトコンテスト」入賞作品発表展	2023年4月14日(金)～4月27日(木)
富士フイルム 企画写真展　写真家 ニコラ・ダティッシュ写真展「芸を継ぐ者～Inheriting the House」	2023年4月14日(金)～4月27日(木)
第31回 林忠彦賞受賞記念写真展 新田樹「Sakhalin」	2023年4月28日(金)～5月4日(木・祝)
越智隆治写真展「Inverted World」	2023年4月28日(金)～5月4日(木・祝)
富士フイルム 企画写真展　FUJIFILM Xシリーズ作品展「夜と光」	2023年4月28日(金)～5月11日(木)
フォトグループいぶき写真展「2023四季のいぶき」	2023年5月5日(金・祝)～5月11日(木)
星野俊光写真展「夜汽車の旋律」	2023年5月5日(金・祝)～5月11日(木)
三上健二郎写真展「廃彩 ～廃校の四季～」	2023年5月12日(金)～5月18日(木)
川村賢一写真展「パースペクティブと写真表現」	2023年5月12日(金)～5月18日(木)
富士フイルム 企画写真展　FUJIFILM Xシリーズ作品展「Not only Landscape」	2023年5月12日(金)～5月25日(木)
一般社団法人　日本自然科学写真協会 第44回 SSP展「自然を楽しむ科学の眼 2023-2024」	2023年5月19日(金)～5月25日(木)
東京写真月間2023「日本写真協会賞受賞作品展」	2023年5月26日(金)～6月1日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展　気ままなボス猫『ケンジ』～ 猫フォトの撮り方・魅せ方教えるべや ～	2023年5月26日(金)～6月8日(木)
富士フイルム 企画写真展　FUJIFILM Xシリーズ 新製品 X-S20作品展「Explore the Unseen World」	2023年5月26日(金)～6月15日(木)
日本建築写真家協会写真展「光と空間 建築の美」PART15	2023年6月2日(金)～6月8日(木)
第11回 エボニークラブ展「旬美」	2023年6月9日(金)～6月15日(木)
鳴海寿勇　星景写真展「南信州　星ごよみ」	2023年6月9日(金)～6月15日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 VOGUE BRASIL に愛された日本人フォトグラファー ノブオ ミケランジェロ タカノ ☆ アンソロジー	2023年6月16日(金)～7月6日(木)
中条孝文写真展「海の記憶　三浦半島西海岸」	2023年7月7日(金)～7月13日(木)
Finders7写真展　いのち煌めく湘南の海　～繋げたい　未来へのバトン～	2023年7月7日(金)～7月13日(木)
富士フイルム 企画写真展　前田景 写真展 INTO THE NORTH presented by FUJIFILM Prints & Gifts	2023年7月7日(金)～7月27日(木)
第16回 山中湖フォトグランプリ写真展	2023年7月7日(金)～7月27日(木)
飯島勝 写真展「もうひとつの風景」	2023年7月14日(金)～7月20日(木)
世取山栄子写真展「Africa ～マサイマラに吹く風～」	2023年7月14日(金)～7月20日(木)
写団薬師総合写真展　風景写真「ときのながれ」	2023年7月21日(金)～7月27日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展　ジャン・アンリ・ファーブル生誕200年記念 今森光彦の地球昆虫紀行	2023年7月28日(金)～8月24日(木)
“PHOTO IS”想いをつなぐ。あなたが主役の写真展2023	2023年8月25日(金)～8月30日(水)
「2023 全日本読売写真クラブ展」	2023年9月1日(金)～9月7日(木)
「富士フイルムフォトコンテスト」歴代グランプリ作品展／2022上位入賞作品展	2023年9月1日(金)～9月21日(木)
安念余志子写真展「うつろふ」	2023年9月8日(金)～9月14日(木)
第8回 極楽蜻蛉Photoクラブ 写真展「翻弄3年　東急沿線 街模様」	2023年9月8日(金)～9月14日(木)
第42回 ハッセルブラッドフォトクラブ写真展	2023年9月15日(金)～9月21日(木)
日本航空写真家協会写真展「SKY GRAFFITI 2023」	2023年9月15日(金)～9月21日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展　広川泰士写真展「2023-2011 あれから」	2023年9月22日(金)～10月12日(木)
富士フイルム 企画写真展　FUJIFILM GFXシリーズ 新製品 ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX100 II」 NEXT STAGE OF LARGE FORMAT「GFX」展	2023年9月22日(金)～10月12日(木)
2023富士フイルム営業写真コンテスト 入賞作品発表展	2023年10月13日(金)～10月19日(木)
江口愼一写真楽園作品展「光の森vol.6」	2023年10月13日(金)～10月19日(木)
第9回 とやま森の四季彩フォト大賞 入賞作品展	2023年10月13日(金)～10月26日(木)
全日写連フォトフェスティバル 2023　第55回カラーフェア／第22回全日本モノクロ写真展／第15回人間大好き!フォトコンテスト	2023年10月20日(金)～10月26日(木)

※緑字は当社が主催・協力する企画展

富士フイルム 企画写真展　KYOTOGRAPHIE インターナショナル・ポートフォリオレビュー 2023 FUJIFILM AWARD受賞作品 ユーリア・スコーゴレワ写真展「Salt and Tears」	2023年10月27日(金)～11月9日(木)
ウルトラセブン55周年記念 中西学 写真展「55 years of ULTRASEVEN Inheritance」	2023年10月27日(金)～11月9日(木)
神田壮亮写真展「WIN! PLACE! SHOW!」	2023年10月27日(金)～11月9日(木)
富士フイルム 企画写真展　GFX Challenge Grant Program 2022 ～Make Your Next Great Image～	2023年11月10日(金)～11月30日(木)
東京ディズニーリゾート®・フォトグラフィープロジェクト「イマジニング・ザ・マジック」写真展 東京ディズニーリゾート40周年	2023年12月1日(金)～12月21日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展　石川賢治 宙(ソラ)の月光浴　SPECIAL SELECTION	2023年12月1日(金)～12月21日(木)
大沢斉 写真展「前照灯」	2023年12月22日(金)～12月28日(木)
2023年　日本雑誌写真記者会写真展	2023年12月22日(金)～12月28日(木)
富士フイルム 企画写真展　東京会議の写真幸福論	2023年12月22日(金)～12月28日(木)
丸の内写真教室作品展&FUJIFILM Xシリーズ作品展	2023年12月22日(金)～12月28日(木)
第19回美しい風景写真100人展	2024年1月4日(木)～1月18日(木)
風景写真Xtension展	2024年1月4日(木)～1月18日(木)
南佐和子写真展「Obscure― 風の記憶―」	2024年1月19日(金)～1月25日(木)
富士フイルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】　上吉川祐一写真展「いのち」	2024年1月19日(金)～2月1日(木)
「麻布未来写真館」パネル展　～次世代へつなぐ麻布の記憶～	2024年1月19日(金)～2月15日(木)
2023年 第18回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展	2024年1月26日(金)～2月1日(木)
フォト寺子屋「一の会」第10回写真展「しあわせの風景」	2024年2月2日(金)～2月8日(木)
富士フイルム 企画写真展　セルカン・ギュネシュ写真展「WITHIN」	2024年2月2日(金)～2月15日(木)
大西展子写真展 ～Melodia～	2024年2月9日(金)～2月15日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展　空撮写真家 山本直洋写真展「そらをとびたい」～空、大地、地球を感じて。～	2024年2月9日(金)～2月29日(木)
第34回 NHK学園 生涯学習 写真展	2024年2月16日(金)～2月22日(木)
山岳写真展「悠久の峰2024」	2024年2月23日(金・祝)～2月29日(木)
佐藤善樹写真展「月照す星瞬く上高地」	2024年2月23日(金・祝)～2月29日(木)
第45回 よみうり写真大賞 入賞作品発表展	2024年3月1日(金)～3月7日(木)
フォトクラブ昴 4人展「十勝」	2024年3月1日(金)～3月7日(木)
富士フイルム 企画写真展　FUJIFILM X100VI 作品展「Timeless Value -色褪せない価値-」	2024年3月1日(金)～3月14日(木)
巽宏安 写真展「桜行脚V」	2024年3月8日(金)～3月14日(木)
富士フイルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 小野啓 写真展「私のためのポートレート」― 全国の高校生のポートレートシリーズ ―	2024年3月8日(金)～3月21日(木)
喜多規子写真展「桜 ―刹那と永遠―」	2024年3月15日(金)～3月21日(木)
富士フイルム 企画写真展　遠藤励 写真展「MIAGGOORTOQ(ミアゴート)」	2024年3月15日(金)～3月28日(木)
富士フイルム 企画写真展　富士フイルム・グリーンファンド 40周年企画「わたしの自然観察路コンクール」受賞作品展	2024年3月8日(金)～3月28日(木)
富士フイルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【ポートフォリオレビュー/アワード 2023】	2024年3月22日(金)～4月11日(木)

■写真歴史博物館／開催写真展 計4本

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展　フジフイルム・フォトコレクション特別展 シリーズ第2弾「写真表現と技法の結晶化」	2023年3月30日(木)～6月28日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展　高橋宣之写真展「鳥の歌 El Cant dels Ocells(オル カン ドルソ セルス)」	2023年6月29日(木)～9月27日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展　生誕90年記念 細江英公作品展「この写真家の熱量を観よ!」	2023年9月28日(木)～12月28日(木)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展　光の魔術師 緑川洋一「瀬戸内のメルヘン」	2024年1月4日(木)～3月27日(水)

施設概要レポート

※データは2023年度実績。2023年度とは2023年4月1日から2024年3月31日を指します。
年末年始を除いた360日が2023年度の写真展開催期間です。

■来館実績

来館者数

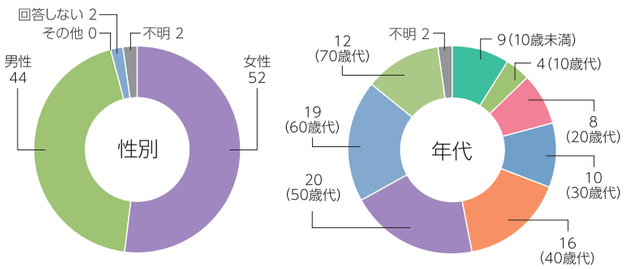
※年末年始を除く稼働日数360日の来館者

354,136人

1日平均
984人

来館者属性

※自社アンケート調査による。(回答人数9,342人、グラフの単位は%)



写真展の開催回数

76本

▶当社が主催・協力する企画展33本　▶公募展43本

若手写真家応援プロジェクト3本、
写真歴史博物館の企画写真展4本、
当社が協力する写真展1本を含む、合計33本を開催。

ギャラリートーク・トークベントなど、鑑賞サポート活動の参加人数

5,369人 193回

写真展は「撮った人=出展者」の気持ちを「見た人=鑑賞者」に伝える場です。フジフイルム スクエアは、写真展を通じてより多くの「人」と「人」の心をつなぐために、さまざまな鑑賞サポート活動を行っています。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から2020年1月より2023年3月まで中断していた対面で行う鑑賞サポート活動を2023年4月より順次再開し、2023年度は合計5,369人の方にご参加いただきました。

▶ギャラリートーク

写真展の会期中、写真展会場内で作品解説を行っています。出展者ご自身に解説いただく機会も多く、出展者と鑑賞者の交流の場ともなっています。

	開催回数	参加人数
富士フイルムフォトサロンでの企画写真展	36回	1,162人
公募展	56回	1,617人
写真歴史博物館	7回	274人

▶トークイベント、体験、ポートフォリオレビュー

写真に親しむ機会を幅広くご提供するために、写真展に合わせたイベントを企画開催しています。

		開催回数	参加人数
トークイベント		3回	356人
体験	今森光彦 切り紙ワークショップ	1回	60人
体験	来館記念特製切り紙図案配布「切り紙で昆虫を作ってみよう!」	会期中毎日開催	1,567人
ポートフォリオレビュー		2回	60人

▶写真歴史博物館コンシェルジュツアー

富士フイルムで写真製品の研究・開発・技術サポートに長年携わったOBがコンシェルジュとして、写真の歴史と企画展について分かりやすく解説しています。

		参加人数
写真の歴史と企画展についての解説ツアー	2024年2月1日～2024年3月31日 毎日1回開催(2月1日に再開し、その後継続実施)	273人

Web公開動画

フジフイルム スクエア Webサイトで公開した動画本数。

21本

▶総再生回数
47,845回　※2024年7月9日現在。広告による再生は含まない。

主要交通広告

日比谷線・六本木駅、日比谷線・恵比寿駅、千代田線・乃木坂駅、都営大江戸線・青山一丁目駅、東京ミッドタウン

自社媒体

・フジフイルム スクエア
Webサイトユーザー数:1,140,632人
・Facebook、X(旧Twitter)投稿件数:449件

主要メディア掲載

テレビ:「日曜美術館 アートシーン」NHK Eテレ／中央紙・地方紙:朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、東京新聞、朝日小学生新聞／雑誌:印刷界、月刊ギャラリー／カメラ紙(誌):隔月刊風景写真、CAPA、デジタルカメラマガジン、フォトコン／WEB:Ameba News、Infoseek ニュース、エキサイトニュース、OVO、All About NEWS、おとなの週末web、CAPA CAMERA WEB、gooニュース、グノシー、公益社団法人日本写真協会、高知新聞、東洋経済オンライン、BIGLOBEニュース、ぴあエンタメ情報、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル、mixiニュース、Yahoo!ニュース、読売新聞オンライン

■来館者、出展者から寄せられた声

フジフイルム スクエアには来館者からアンケートで感動の声が多く寄せられます。また、出展者からも展示を通して発見したことや、来館者との交流についての感想など、たくさんの声をいただきます。このように、フジフイルム スクエアで写真を通じて「こころ彩られ」、紡ぎ出された言葉の一部をご紹介します。

※お寄せいただいた声と写真の被写体の方は関係ありません。

《来館者の声》

- 知らなかった写真家の素敵な作品に触れて自分の世界が広がるよう。いろいろと刺激になって楽しかったです。
- 充実した展示で時間を忘れじっくり拝見しました。キャプションが分かりやすく、鑑賞の助けになりました。
- 初めて写真展に来ましたが、想像以上に面白くワクワクしました。
- さまざまな写真家の作品を一度に見られ、興味のある分野以外にも多くの発見や感動があり、大変充実した時間を過ごせました。
- 無料でこんな素晴らしい写真展が見られることに驚きました。
- いろいろな写真の展示を見て、構図や見方についての勉強になりました。
- 銀写真プリントが繊細でクオリティが高くて素晴らしい。大きなサイズで見ることができ、とても迫力を感じました。
- 環境の大切さについて知ることができる写真展が開催されており、子どもと話す重要な機会を提供していると思いました。
- 写真家のトークイベントがとても楽しく、作品の背景を聞かせていただき興味深かったです。
- 作家本人と話せる場にもなっていることが素晴らしいです。
- 写真を撮って残すことの大切さをつくづく実感しました。
- コンシェルジュの方の説明が分かりやすくて面白く、とても勉強になりました。ありがとうございました。
- 美しい空間でゆったりと写真鑑賞に浸れ、癒やされています。休館日が少ないのもうれしいです。
- 元気をくれるような素晴らしい写真がいつも展示されていて、感動します。また立ち寄りたいです。
- 写真文化を発信するこのような拠点は貴重だと思います。

《出展者の声》

- 初めての写真展でしたが、手厚いサポートを受けて展示を作り上げることができました。この経験は、今後写真展を開催する際に間違いなく生きると思います。
- デザイナーの方が監修したクオリティの高い写真展告知用制作物を作っていただき、誇らしかったです。作品制作への思いを語った動画も素敵に仕上げていただき、感動しました。
- 「この会場で写真展ができるなんてすごいことだね」と多くの方に言っていただき、身の引き締まる思いでした。スタッフの方々にも大変丁寧にご支援いただき感謝しています。
- 天井が高く、素晴らしい会場での写真展。作品の前でただ立ち尽くす方、涙を流す方がおられ、自分の思いや世界観が伝わっていると感じて、とてもうれしかったです。
- ギャラリートークで参加者の皆さんが真剣に聞いてくださっていることを肌で感じました。そして、さまざまなメッセージから皆さんに感動いただけたことが伝わってきてうれしかったです。
- 海外の方含めて多様なお客さまと写真の話ができたことが貴重な経験で、日々感動していました。とても刺激的な体験でした。
- 写真展開催という貴重な経験ができたことに加え、富士フイルムをはじめ多くの関係者の方々やお客さまとの心に残る交流があり、多くのものを得ることができました。
- 写真展を通して自分の成長を感じることができました。同時に、制作活動における課題も見つけたので、これを改善して次の発表の機会に生かしたいと思います。

- 「展示作品のプリントがきれい」と非常に多くのお客さまにおっしゃっていただき、銀写真プリントの良さを再認識し、とても勉強になりました。
- 質の高い写真展が開催できるよう出展者を支援してくれるフジフイルム スクエアの姿勢に感服しました。ここは日本の写真文化の歴史と最先端の芸術を発信する貴重な場所だと感じました。

《従業員の声》

- 訪れるたびに写真はいいなあと思います。これからも若い写真家の支援を続けてほしいです。
- 気軽に写真を鑑賞できる大切な場所。写真の素晴らしさをいつも再認識します。
- 歴史的な名作や斬新な企画など、多様な写真展が企画されていて、毎回楽しみにしています。
- 豊かな写真文化を感じる施設で、従業員として誇りに思います。
- 人間の想像力を超えるような素晴らしい写真に感激。これからも心を動かされる写真を展示してほしいです。
- 長年写真事業に携わられたOBが写真の歴史について熱く語ってくれて勉強になりました。こういう活動は大切ですね。
- 写真展会場で目を輝かせて写真を鑑賞している人たちを見て、写真でこれだけ人を楽しませることができるんだと感動しました。
- 写真の歴史を知ったり、写真展を通じて最新の文化に触れたりできて興味深く、いつも新たな発見があります。

・本活動報告書の2023年度とは2023年4月1日～2024年3月31日を指します。

・本活動報告書に掲載されている「主要メディア掲載」および「ご来館者数」のデータは自社調査に基づくものです。

・「来館者数」は写真展期間中のフジフイルム スクエア全体のご来館者数の合計です。

・「来館者の声」および「来館者属性」は、2023年度に開催された写真展期間（2023年4月1日から2024年3月31日）に実施された自社アンケート調査に基づくものです。

・本活動報告書では、銀を含む化学薬品をゼラチンに溶かして塗布した写真用紙に、ネガフィルムなどを通して露光し、現像処理して得られる写真プリントのことを「銀写真プリント※」と表記しています。
※フィルム・デジタルカメラ画像を写真店やラボに依頼してプリントする、従来からの『写真（銀塩方式）』プリントを示す呼称

・本活動報告書に掲載されている写真は、新型コロナウイルス感染対策を十分に講じたうえで撮影しています。

・年間を通じた写真展運営の協力会社は、下記のとおりです。
展示作業：株式会社フレームマン
展示物・告知物制作：富士フイルムイメージングシステムズ株式会社
運営協力：富士フイルムビジネスエキスパート株式会社

フジフイルム スクエア 2023年度 活動報告書

発行日：2024年10月
発行・編集：富士フイルム株式会社
コーポレートコミュニケーション部　宣伝部
〒107-0052 東京都港区赤坂9-7-3
発行者：松島大泉
制作：富士フイルムビジネスエキスパート株式会社
企画・デザイン：株式会社ラジアン
印刷：株式会社ジョーメイ
©富士フイルム株式会社　禁無断転載

FUJIFILM

Value from Innovation

90th そしてその先の未来へ 100

FSC www.fsc.org ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C173715

VEGETABLE OIL INK